〝状況〟の変化と〝もの自身〟の変化

——プラトン『テアイテトス』（154B～155D）における背丈比べのパラドクスの哲学的意味——

藤沢令夫

一　はじめに——問題の周辺
二　テクストにおける問題の記述
三　パラドクスの意図（1）——諸解釈批判
四　パラドクスの意図（2）——'Cambridge' change と 'real' change
五　〝常識の逆転〟の再吟味——〝状況〟の変化は〝もの自身〟の変化である
六　プラトン自身の哲学との関係（1）——『パイドン』96A～102A との照合
七　プラトン自身の哲学との関係（2）——『パイドン』102B～103A との照合
八　イデア論内部の不整合の照らし出し——「分有」用語の記述方式
九　『パルメニデス』——哲学の新たな課題へ
一〇　パラドクスの意味と役割の見定め

一　はじめに——問題の周辺

——七十歳のソクラテスと十六歳のテアイテトスがいる。背丈を比べると、今はソクラテスのほうが少し大きい。しかし若いテアイテトスはまだ身長が伸びつつあり、ソクラテスの背丈はそのままであるから、一年後には、ソクラ

テスはテアイテトスより小さくなるものとしよう。そうすると、ソクラテスは大きさの点で、①（一方では）元のままであり、「より小さく」なることはないのに、②（他方では）「より大きく」あったのが「より小さく」なる、というパラドクスが生じる。――

このような問題をプラトンは、『テアイテトス』（154B～155D）において提示した（正確な記述は後に第二章で見る）。人はこれについて、どのように考えるであろうか。

おそらく誰しもが最初に思うこと、そして実際に最も多く表明されてきた反応は、これはパラドクスでも何でもないということであろう。ソクラテスが、①一年前の彼自身と比べて元のままの大きさであり、「より小さく」なっていないけれども、②成長したテアイテトスと比べると「より小さく」なるということに、何の不思議もない。「小さくならない」と「小さくなる」とは、比較の相手が同一ならばたしかに矛盾関係にあるが、何と比べてそうなのかを右のように補足指定すれば、①と②の間に何ら矛盾はないことは明々白々であろう。もともと「大きい」「小さい」は「等しい」「二倍である」などと同じく、本来「……との関係において」「……よりも」といった相関者を明示して言表されるべき〝関係概念〟あるいは〝不完全述語〟である。だから――と人々は言う――もしプラトンが本気でこのような〝パラドクス〟を提出したとすれば、それはプラトンがこの種の関係概念のあり方を理解せずに、これを非関係的な性質（例えば「白い」など）と混同していたことを告げるものである、と。(1)

こうした批評は、ここだけでなく他の著作の箇所（例えば『国家』V. 479B, VII. 523E）との関連においても、プラトンに対して何度もくり返し語られてきた。現代においてその先駆けをしてみせたのは、バートランド・ラッセルだったかもしれない。いわく、「プラトンはいつも関係語（relational terms）についての無理解のために混乱におちいる。彼は、AがBより大きくCより小さければ、Aは同時に大にして小であると考え、これを矛盾とみなした。このような混乱は、哲学の小児病（the infantile diseases of philosophy）に属する」、と。(2)

さてしかし、ほんとうにこうした批評で片づけることができるであろうか。

まず一般的にいって、評者たちが説く〝関係的表現の論理〟（相関者の指定補足を必要とすること）についてプラトンが無理解であったというようなことは、彼の実績から見て、とうてい考えられないことである。初期の対話篇以来、プラトンは機会あるごとに、この種の「より大」「より小」「二倍」「半分」「父親」「兄弟」「主人」「召使」「知識」といった関係的な概念を取り上げ、これらを

「何かとの相関関係にあること――〝何かの〟〝何かよりも〟等として語られること――が本来の性格であるようなもの」（*ὅσα ἐστὶ τοιαῦτα οἷα εἶναί του, Rp.* IV. 438A7～B1; *ἔχει τινὰ τοιαύτην δύναμιν ὥστε τινὸς εἶναι, Charm.* 168 B 3, etc.）

といった定式的表現によって規定し、そのあり方をさまざまの問題連関の中で執拗に分析しているのである（『カルミデス』168A～169A、『饗宴』199D～E、『国家』IV. 438A sqq.、『パルメニデス』133C～134Aなど）。これらの箇所に見られる考えと表現は、アリストテレスによる「関係」（*πρός τι*）のカテゴリーの記述の中に承けつがれているのであって（『カテゴリアイ』七章）、無理解どころか、プラトンはこの種の関係的な概念の性格に着目した最初の哲学者であるとさえいえる。

では、それにもかかわらずプラトンは、ラッセルの言うように「AがBより大きくCより小さければ、Aは同時に大にして小であると考え、これを矛盾とみなした」のであろうか。これも、とうていありえないことであろう。

そもそもプラトンは、ほかならぬ〝矛盾律〟の基礎となる考えを、これまた史上はじめて明確入念な形で表明した人でもあった。「同一のものが、それの同一側面において、同一のものとの関係において、同時に、相反することをされ、あるいは相反するものであり、あるいは相反することをなすことはできない」（『国家』IV.436B～437A）。すなわち、ここで彼は、同一のものが相反する状態にある（例えば大にして小である）ということは、それだけでは必ずしも

不可能とも〝矛盾〟ともいえないこと、それが不可能といえるためには「同一側面において」(κατὰ ταὐτόν)、「同一のものとの関係において」(πρὸς ταὐτόν)、「同時に」(ἅμα) といった厳格な条件が必要であることを、はっきりと表明しているのである。

あるいは『パルメニデス』(128E～129E) に登場する若いソクラテスは、エレアのゼノンの「存在が多ならばそれらは似ていて似ていないことになるが、これは不可能」という議論に対して、「あるものが似ていて似ていない」(一般に、xはFでありかつ反F（または非F）である）ということは、それだけではけっして不可能でも何でもないことを示した。例えば「私は多なるものでありまた一なるものである」という命題についてみても、「私」は左・右・前・後・上・下の各別々の部分をもつという意味では「多なるもの」であり、他方、ここにいる七人のなかの一人であるという意味では「一なるもの」である (129C4～D2)。このように、一般に「xはFにしてかつ反F（または非F）である」ということは、xがどの点においてFであり、どの点において反F（非F）であるかという、それぞれの観点を指定しさえすれば「何ら驚くべきことではない」とソクラテスは論じた。つまり、先のラッセルの発言とはまったく逆のことが実際には論じられているのである。

そして、問題の『テアイテトス』におけるパラドクスそのものについて見ても、先述のような論評にはさしあたって重大な疑義があることを言っておきたい。なぜなら論者たちは、ソクラテスは①元の彼自身と比べて(than he was)「より小さく」ならないが、②テアイテトスと比べて (than Theaetetus)「より小さく」なるというように、適切な 'than' phrase を補足挿入すれば外見上の矛盾は解消する、これがこのパラドクスに対する簡単でかつ正しい対処法だと言うけれども、[3] しかしそのような 'than' phrase に相当するものは、〝補足挿入〟するまでもなく、はじめからテクストそのものに明記されているのである。すなわち、ソクラテスが「より小さく」なるのは「若い君（テアイテトス）よりも小さく」(σοῦ τοῦ νέου……ἐλάττω) なるのであり、他方、大きさが一定していて増減しないのはソクラテス自

身なのであると（ἐμὲ τηλικόνδε ὄντε……μήτε τοὐναντίον παθόντα——155 B 6～8, cf. 154 C 3～4）。

こうして、以上のようないずれも歴然たる事実に目を向けるならば、先のパラドクスについて誰しもが最初に思うであろうこと、そして実際に多くの評者が述べたててきたような事柄は、プラトン自身にはすでに先刻十分に承知のところであったとしか考えられないであろう。だが、それにもかかわらずプラトンは、このパラドクスが真剣な考察に値するものであることをつよく表明しているのである。

「われわれは時間の余裕をたくさんもっているつもりになって、あら探しをするのではなく、ほんとうの意味で、われわれ自身を試しながら、われわれの内に現われたこの問題がそもそも何であるかを、あらためてもう一度考察し直してみるべきだろう」（154 E 8～155 A 2）

そしてこの箇所を、次のような対話で結ぶ。

テアイテトス　神々に誓って、ソクラテス、一体これは何であるのかと、私はどんなにひとかたならず驚いていることでしょう。ときには、こうした問題を見つめていると、ほんとうに目がくらんでしまうのです。

ソクラテス　まことにその驚きの情こそは、哲学者のものなのだ。哲学の出発点はそれ以外にはないのだから。（155 C 8～D 4）

これは尋常のことではない。プラトンは、すべて上述のような実績と事実にもかかわらず、そして『パルメニデス』の上記箇所では、「あるものが似ていて似ていない」というゼノンのパラドクスを「何ら驚くべきことではない」（οὐδὲν θαυμαστόν）と認定したにもかかわらず、ここでは一見相似たパラドクスについて、それが「目がくらむ」ほどの「驚き」（θαυμάζειν）に値することを対話人物に語らせ、「哲学の出発点」（ἀρχὴ φιλοσοφίας）にかかわるような重大な問題をはらんでいることを示唆している。そしてその問題を、「ほんとうの意味でわれわれ自身を試しながら、あらためてもう一度考察し直してみるべきだろう」と述べているのである。

とすれば、プラトンがここで提起しようとした問題は、上述の評者たちがそう解したようなものではなく、もっと違った大きな問題なのではないだろうか。そして、もし評者たちがその問題を看てとることができずに、この箇所の議論を〝哲学の小児病〟の徴候として片づけてしまうとすれば、それは彼ら自身のほうがある種の思い込みのために「驚きの情」を失い、そのために哲学的に〝小児病〟におちいっているからではあるまいか。『テアイテトス』という対話篇は、古人によって「試練的」（ペイラスティコス）――力量を試す対話篇――と性格づけられている。たしかに対話篇全体がこの呼称にふさわしいけれども、とくにこのパラドクスの短い箇所は、問題が思いきって原理的に単純化されているだけに、それだけ一そう際立って解釈者たちの力量を試す試金石となっているといえる。

本稿の目的は、私自身をそのような「試練」のもとに置いて、プラトンがここで示そうとしたほんとうの問題は何であったか、そしてその問題はプラトン哲学全体の発展にとって、また哲学そのものにとってどのような意味をもっているかを、プラトンとともに「あらためてもう一度考察し直してみる」ことである。

二　テクストにおける問題の記述

問題の箇所（154B～155D）の解釈のためには、それがどのようなコンテクストの中に――全体としてのどのような議論の展開の中に――置かれているかということが、重要な関連をもっている。ところが、まさにそのコンテクストとの関連性が一見明らかでないことが、解釈者たちを当惑させてきた点のひとつであった。[4] この箇所は直接的には、ひとつのかなり詳細な知覚理論が提示されつつある只中に挿入されているが、先述のようなパラドクスがその知覚理論と内容的にどのような積極的関係があるかということからして、あまりよくわからないからである。

われわれは後に、逆にこのパラドクスがまさにこの位置に置かれていることの必然性と、前後の知覚理論との積極的な内容上の連関性を確認するはずであるが、さしあたってはしかし、当該箇所のテクストそのものを、必要な範囲

での前後関係とともに見届けておかなければならない。

「知識とは何であるか」という問に対してテアイテトスが提出した「知識とは知覚にほかならない」という答（151E）を、ソクラテスは直ちに、「各人が知覚するとおりのものが、そのまま各人にとってある」というプロタゴラス的命題と結びつけ（151E～152C）、これを支える一般的な立場を徹底的な相対主義と流転説として示したうえで（152C～153D）、その立場にもとづく知覚理論の構築にとりかかっていた（153Dsqq.）。

例えば目が白い色を知覚するという事態は、どのようにとらえられるべきか。――その場合、白色は、目の外にも内にもその他いかなる特定の場所にも、それ自体で単独別箇のものとして存在するものではない。何ものも他と無関係にそれ自体で単一にあるものではない、というのが大原則なのである。白や黒などの色は、目がみずからに適合する運動とぶつかることによって生じるのであるが、白色それ自身はその「ぶつかるもの」でも「ぶつかられるもの」でもなく、両者の中間に、各知覚者に固有でそれぞれ各様のものとして生まれる。すなわち、ある色の君にとっての知覚的な現われは、犬その他の動物にとっての現われとも、他の人にとっての現われとも同じではなく、さらには君自身にとってさえも、その色はけっして同じものとして現われることはない。君自身の状態が、片ときも同様のあり方を保持しないからである（153D～154A）。

問題のパラドクスの箇所は、この後にすぐつづいてはじまる――ソクラテスの次のような言葉とともに。

「ところで、かりにもし、われわれがそれと測り比べる相手のもの、あるいは触れる相手のものが、もともと大きなものであったり、白いものであったり、温かいものであったとしたら、そのものが他のものに出会ったとしても、けっして別のものになることはなかったであろう――いやしくもそのもの自身が何ら変化しないとすれば。

他方また、測り比べたり触れたりする側のものも、かりにもしそれらのうちのどれかであったとしたら、他のものがそこへやってくるとか、他のものが何かの変容を受けるとかしたとしても、自分自身が何も変容を受けな

いとすれば、別のものになることはなかったであろう」(154B1～6)。

「われわれがそれと測り比べる相手のもの、あるいは触れる相手のもの」、および「測り比べたり触れたりする側のもの」という表現はかなり唐突であるが、[5] 以下の議論と関連するかぎりにおいては、要するにこの両者のどちらについても次の（1）～（4）が成立するというふうに、右の文章の内容を整理することができるであろう。

（1）　あるもの（x）が、もしそれ自体として何らかの特定の性質（F）のものであるとしたら、

（2）　それ（x）が他のもの（y）に出会ったり、他のもの（y）が何らかの変容を受けたとしても、

（3）　自分（x）自身が何ら変容を受けないとすれば、

（4）　別のもの（F以外の性質のもの）になることはないはずである。

（1）～（4）の原文の全体は、過去形（副時称）の直説法動詞を用いて、事実に反することを想定するアンリアルの条件文の形で表現されている(εἰ …… ἦν, οὐκ ἄλλο ἂν ἐγεγόνει s. ἐγένετο)。――直前の知覚論において、何ものも他と無関係にそれ自体であるのではないこと、例えば白い色は、いかなる特定の場所にもそれ自体で単独別箇のものとして位置づけられるものではなく、そのときどきの知覚者と相関的に各様の仕方で現われるものであることが示された。そこで、かりにこの認定と相反する前提を立てて、もし（ほんとうはそうではないのだが）あるものがもともと特定の性格F（例えば「大きい」「白い」「温かい」）を固定的に有しているとしたならばどのような問題が生じるか、という仕方でソクラテスはこの箇所の議論を始めているのである。

この反事実的（アンリアル）想定によって生じる問題の第一の例――「ちょっとした例」――としてソクラテスが挙げるのは、次のようなものであった。

「サイコロが六つあるとせよ。その横へ君が四つのサイコロをもってくるならば、それは四つより多くて、一倍半であるとわれわれは言う。次にしかし十二のサイコロをもってくるならば、それ（四つのサイコロ）はより少な

くて、半分であると言う。そしてこれ以外の言い方は断じて許されない」。だがプロタゴラスは問うてくるだろう。「増加すること以外に、何かがより大きくなったり、より多くなったりする道があるのか？」と。(154C1～9)

この問にどう答えるかときかれて、テアイテトスは、直接この問に対しては「ない」と答えるだろうが、その前に語られた事柄（サイコロの比較）のほうについては「ある」と答えるだろう、と言う。

先に示した（1）～（4）の命題と重ね合せて考えると、この「ちょっとした例」で言われていることは次のようになるであろう。

（1′）六という一定の数のサイコロは、（2′）それが四つのサイコロと並べてくらべられる（＝他のものと出会う）としても、（3′）それ自身が増加するのでないならば、（4′）「より多い」ものになることはないはずである。（――だからテアイテトスは、プロタゴラスの質問に対して「ない」と答えた。）

他方しかし、六つのサイコロは四つのサイコロと並べられることによって、それが「より多い」と言われなければならない事態が新たに生じることもたしかである。「それ以外の言い方は断じて許されない」のである。（――だからテアイテトスは、より多くなる道が「ある」と答えた。）

しかしソクラテスは、このような仕方で説明を行なうことなく、ここで先述のように「ほんとうの意味でわれわれ自身を試す」つもりで「あらためてもう一度考察し直す」という態度表明ののち、新たに次の三つの命題（a）（b）（c）についてテアイテトスの同意を確認し、その三つの同意事項の間の衝突というかたちで別の問題を再提示する、という手続きをとる。

（a）何ものも、自分が自分に等しいままであるかぎりは、嵩（大きさ）の点でも数の点でも、より大きくなることも、より小さくなることもありえない。

（b）あるものに付け加えられることもなく、引き去られることもなければ、そのものは増大も減少もせず、

つねに等しいままである。

（c）あるものが後になってから、以前にはそうでなかったところのものであるということは、なることやなりゆくことなしには不可能である。（155A3～B3）

これらの同意事項の間の衝突――「互いに同士討ちする」（μάχεται αὐτὰ αὑτοῖς）こと――の例として、ソクラテスはここで、先のサイコロの例と別に、前章で見た背丈比べのパラドクスを提示する。それはテクストでは、次のように記述されている。

「私がこれだけの大きさであるとして、[6] 増大もせず、その反対の変容（減少）もこうむらないとすれば、一年の間に、若い君よりも今はより大きくあるが、後になるとより小さくあることになる――私の背丈が何ひとつ引き去られたのではなく、君が大きくなったことによって。

すなわち私は後になってから、以前にはそうでなかったところのものであるわけだ――それとなることなしにね。なぜなら、なりゆくことなしになることは不可能であり、しかるに私は、背丈を何ひとつ失わなかったとすれば、けっしてより小さくなりゆくことはなかったはずだから」（155B6～C4）

最後に言われている、（より小さく）「なること」（γενέσθαι）は「なりゆくこと」（γίγνεσθαι）なしには不可能であるということは、新しく加えられた補足規定であり、ここではむしろそのことがパラドクス性の表現のために大きく表面に立てられている観がある。しかしもともとこの背丈比べの例は、直前に確認された三つの同意事項（a）（b）（c）の「同士討ち」の例として示されたものであるから、基本的にはこの三つの命題と重ね合わせて理解されるべきであろう。新たに加えられた点を補足して言えば、その「同士討ち」とは次のごとくである。

すなわちこの場合、①「これだけの大きさ」と言われたソクラテスの背丈は「増大も減少も」していないし、「何ひとつ引き去られていない」のであるから、同意事項（a）と（b）および新たな補足規定によって、ソクラテスは

「より小さくなりゆく」ことはありえず、したがってまた「より小さくなる」こともありえない。

②他方しかし、ソクラテスはテアイテトスよりも「今は大きくあるが、後になるとより小さくある」のであるから、これは同意事項（c）のなかの「あるものが後になってから、以前にはそうでなかったところのものである」という条件に該当し、したがって（c）の確認内容によって、ソクラテスは「より小さくなりゆき、またなる」のでなければならない。

三つの同意事項の間の「同士討ち」とは、実際にはこのようにして、（a）（b）〔→①〕と（c）〔→②〕との間の衝突であり、この衝突の現場がテクストでは、「私は後になってから、以前にはそうでなかったところのものである――それとなることなしに」（155C1～2）という短い言葉によって、パラドクスの形で集約的に表現されている。（ソクラテスは先のサイコロの場合もこの「同士討ち」の一例であると言っているが（155B5～6）、これについても同様に考えることができるであろう。[7]）

同時にまた、この背丈比べのパラドクスの記述と、先に見たこの箇所全体の導入部分（154B）の記述との対応関係にも、注意しておかなければならない。私の知るかぎりこれまで誰もこの対応に注意を喚起していないけれども、そのことへの着目はこのパラドクスの理解のために、ひとつの重要なポイントとなるかもしれないからである。

すなわち、先にわれわれは、導入部分で語られている事柄を（1）～（4）の形に整理して示したが、これらの条件の内容――とくに「測りくらべる側のもの」について述べた後半部（154B3～6）の内容――は、この背丈比べのパラドクスの記述内容と、次のように逐一対応していることがテクストから知られるであろう。

（1）「あるものがそれ自体として何らかの特定の性質のものである」（ἐμὲ τηλικόνδε ὄντα）――→（1′）「私がこれだけの大きさである」

（2）「他のものが何らかの変容を受ける」（ἄλλου……τι παθόντος）――→（2′）「君が増大する（大きくなる）」（σοῦ

αὐξηθέντος)

(3)「自分自身は何も変容を受けない」(αὐτὸ μηδὲν παθών)——→(3̂)「私は増大も減少もしない」(μήτε αὐξηθέντα μήτε τοὐναντίον παθόντα ⟨sc. ἐμέ⟩)「私の背丈は何ひとつ引き去られない」

(4)「そのものは別のもの(もともとの性質と違ったもの)にならないはずである」(οὐκ ἄλλο ἂν ἐγένετο)——→(4̂)「私はより小さくなりゆく(なる)ことはないはずである」(οὐκ ἄν ποτε ἐγενόμην ἐλάττων)

この(4″)はしかし、上述のように、同意事項(c)〔→②〕と正面衝突することが示されたわけである。

先に注意したように、このパラドクスの記述の(1″)〜(4″)と対応する(1)〜(4)のほうの文章は、全体が事実に反するアンリアルの条件文の形で語られていた。このことは、よく心に留めておかなければならない。

——さて、テクストではこのあと、こうしたパラドクスについての「驚きの情」(前章で見た)が語られたのち、ソクラテスは、「なぜ、プロタゴラスが語っているとわれわれが言うところの言説によれば、これらの事柄がこのようになるのか」をテアイテトスに説明するために、「名高い人——いやむしろ名高い人々——の考えに秘められた真実を探り出してみせよう」と言う(155D5〜E1)。そしてその「秘められた真実」の内容として実際に語られるのは、この箇所の直前に示された第一段階の知覚理論をさらに詳細に発展させた、知覚論本論ともいうべきものであった(155E〜157D)。

こうして、このパラドクスに直接関連する箇所は終る。

三　パラドクスの意図(1)——諸解釈批判

前章で見たテクストの記述をふまえて、そこで語られているパラドクスの意味を考察して行くことにしよう。二つの例が挙げられていたが、便宜上、主として背丈比べのほうについて論述を進めることにする。そのパラドクスは、

簡略化して言えば、

①ソクラテス(自身)は「より小さく」ならない。あるいは、ソクラテスは大きさの点で変化しない。

②ソクラテスは（テアイテトスよりも）「より小さく」なる。あるいは、ソクラテスは大きさの点で変化する。

という二つの命題の対置によって成立していた。

むろん、①と②は〝矛盾〟の関係にあるわけではない。①はソクラテス自身の背丈だけに着目した場合のことであり、②はテアイテトスとの比較にだけ着目した場合のことであって、それぞれの観点が違っているからである。そして、プラトン自身もそのことは十分承知していたとしか考えられないこと、したがってまた、プラトンが関係的な概念についての無理解ゆえに①と②を矛盾とみなしてこのパラドクスを提出したという解釈は、あらゆる点からみてとうてい受けいれがたいことは、すでに第一章でかなり詳しく見とどけられた。

では、このパラドクスの意図はどこにあるのか。さしあたって、次のことに注意しておきたい。

①の「より小さくならない」（変化しない）と②の「より小さくなる」（変化する）とは、矛盾関係にはないけれども、しかしそれぞれソクラテス自身の背丈とテアイテトスとの比較に着目し、かつ同意事項（a）（b）と（c）にもとづくかぎりでは、どちらもそれぞれ「より小さくならない」（変化しない）――「より小さくなる」（変化する）と言えるための条件を完全に充たしている。そのかぎりにおいて、①の「より小さくなる」（変化する）と②の「より小さくならない」（変化しない）という述定そのものは、どちらも完全に正当に成立するのである。テクストの記述に見られた強調点も、そこにあった。

パラドクスのこのような提示のされ方を見ると、プラトンは「何とくらべて」（'than' phrase）を考慮に入れずに①と②を〝矛盾〟として示そうとしたのではさらさらなくて、ポイントはむしろ、「より小さくなる、ならない」（変化する、しない）という認定のための、そのような'than' phrase をもろに含めたうえでの、二つの異なった観点と条

件そのものの対置のほうにあると考えられる。そしてこのパラドクスがひとつの問題提起としての意味をもつとすれば、それは、対置された二つの異なった観点（何に着目してのことか）と条件（(a)（b）と（c）のうち、最終的には①のそれと②のそれのどちらを採るべきかという問題提起としてであろう。つまり、どちらの観点と条件にもとづいて語られる「変化」（例えば「より小さくなる」）が、最終的には、ほんとうの「変化」として認定されるべきかということが――たとえ常識的にはこの問は奇異に思えるかもしれないとしても、しかし何らかの理由によって――問われているということである。

この点はさしあたっては注意と予想のままにとどめておくとして、しかし予想された問題の意味をさらに漸次明らかにして行くためにも、先に斥けられた種類の解釈よりももう少しシリアスにこのパラドクスを受けとめようとした人々が、どのような解釈を提出しているかを見ることにしたい。

(a) H・ジャクソン、F・M・コーンフォード、W・D・ロスの解釈、およびそれに対する批判

ジャクソン[8]、コーンフォード[9]、ロス[10]たちはこの箇所を、類似の問題が扱われている『パイドン』102B～103A との比較において論じた。彼らの解釈は、若干の相違点はあるけれども、次のような論旨の大綱においては一致している。

『パイドン』の上掲箇所では、

「例えば〝シミアス（x）はソクラテス（y）より大きく、パイドン（z）よりは小さい〟と言うとき、君はそれによって、シミアス（x）の中には〈大〉と〈小〉との両方がある、ということを言っている」（102B）

ということが同意されている。すなわち、この場合「（より）大」「（より）小」は、「xの内にある〈大〉」「xの内にある〈小〉」というかたちで、いわゆる〝内在形相〟あるいは〝内在性質〟（以下〝内在性質〟と統一して記すことにする）とみなされているのである。そして、ただ〈大〉そのもの（〈大〉のイデア）だけでなく「われわれ（x、y、z……）の内にある〈大〉」（内在性質）もまた、けっして〈小〉を受け入れることはなく、「〈小〉が攻めよせてくるときは、

退却して場所をゆずるか、それとも滅びるかのどちらかである」ということが、同箇所全体の論旨であった。

この考えを『テアイテトス』の背丈比べの場合に適用するとどうなるか。『パイドン』で表明されているように「xはyより大」が「xの内に〈大〉がある」を意味し、「xはzより小」が「xの内に〈小〉がある」を意味するのであれば、「ソクラテスはいまテアイテトスよりも大であるが、一年後のテアイテトスより小である」という事態は、「ソクラテスの内に（テアイテトスと比べて）いまは〈大〉があるが、一年後には〈小〉がある」ということを意味することになる。すなわち、一年の間にソクラテスの内において、〝内在性質〟としての〈大〉が〈小〉へと交替する――「〈大〉が退却して〈小〉に場所をゆずる」――わけであるから、その意味において、ソクラテス自身の内に変化が起こること、ソクラテスがひとつの内的な変化（change in himself, internal change）をするということになる。

しかしこれはおかしい。ソクラテスの背丈そのものはまったく元のままなのであるから、実際には、ソクラテス自身は何らの変化もしていないことは明白である。『パイドン』では表面に出なかったこの明白な事実を、プラトンは『テアイテトス』ではっきりと、①「ソクラテスの大きさは増大も減少もしない」「ソクラテスの背丈は何ひとつ引き去られていない」というかたちで表面に立てる。そしてこの①により、実際にはソクラテスの内に何も変化は起こっていないという事実に注意を喚起することによって、ソクラテス自身の変化（内的な変化）としてとらえる②の誤りを――ひいては、そのようなとらえ方を帰結せしめる〝内在性質〟の考えの（少なくとも「大」や「小」の場合における）誤りを――明るみに出すことがこのパラドクスの眼目にほかならない。

――ジャクソン、コーンフォード、ロスたちは以上のように解釈した。このうちジャクソンとロスは、『パイドン』と比べてプラトンが『テアイテトス』では、「大」「小」が事物に内在する性質ではなく、どこまでも他との関係（比較）においてのみ成立する純粋の〝関係概念〟であるという、正しい認識へと前進しているとみなす（奇妙なことにこれは、先に第一章で言及された評者たちと全く正反対の見解である）。これに対してコーンフォードは、「大」「小」は依然、

「白い」や「温かい」といった性質と同列に扱われていることを指摘し、ただ、例えば「白くなる」という変化は当の事物そのものにおける〝内在性質〟の交替ではなく、事物と知覚者との「間に」(between＝μεταξύ, 154A2) 起こるものとされている点に、『パイドン』の考えからの推移を見る。そうした相違点はあっても、しかしこの三人はいずれも、〝内在性質〟の考えの放棄ということと関連して、パラドクスを構成する①と②のうち、①で語られる「不変化」(小さくならない) が正しく、②で語られる「変化」(小さくなる) は――少なくともソクラテス自身の身に起こる「変化」という意味では――誤りであるとみなして、そのことを示すのがこのパラドクス提示の意図であると解する点においては一致しているといえる。

この線での解釈の当否を検討してみよう。

「xはyより大」の「より大」を「xの内なる〈大〉」(内在性質) としてとらえる『パイドン』での考えが、『テアイテトス』のこの箇所には現われていないことはたしかである。しかしまず、右に述べたジャクソンやロス流の解釈について注意しておかなければならないが、「大」や「小」の関係的な性格ということ自体については、『パイドン』ではその認識が欠落あるいは不十分であって、『テアイテトス』のほうにだけ表明されている新たな正しい認識であるというようなことは、けっしていえないであろう。例えば「xの内にある〈大〉」の「大」は、『パイドン』のテクストでは、いちいち「yの内なる〈小〉との関係における」(e.g. πρὸς τὴν Σιμμίου σμικρότητα) という限定句を伴って表現されていて、厳密正確には「yの内なる〈小〉との関係における、xの内なる〈大〉」(largeness in x *in relation to* smallness in y) と表記されるべきものとみなされている (102 C4,7, cf. C11～D2)。関係性 (πρός, in relation to) そのものの表明に関するかぎりでは、むしろ『パイドン』のほうが明確もしくは露骨であるといえよう。――われわれはすでに第一章において、一般に『テアイテトス』以前の著作に見てとられる〝関係語〟〝関係概念〟についてのプラトンの認識をたしかめてある。

のみならずまた、プラトンは『テアイテトス』のこの箇所において、「大」「小」だけをいわゆる〝関係概念〟（「似」「等」「二倍」などと並ぶような）として特別扱いしているわけでもない。前章でテクストについて見られたように、あるものが有する性質・性格の例としての「大きい」と「白い」「温かい」とは、まったく同等の資格で挙げられていた（154B2）。アリストテレスによる〝関係〟（πρός τι）と〝性質〟（ποιόν）とのカテゴリーの区別からいえば、このうち「白い」「温かい」は間違いなく〝性質〟のカテゴリーに属する。[11] しかしプラトンはそのようなカテゴリー的区別に関わりなく、すべての性質・性格（F）を念頭に置きながら、ただ問題点が最も露骨なかたちであらわになる「大」「小」の場合について、このパラドクスを提示したと解されるのである。この点についての事実認定としては、コーンフォードの――あるいは後述するブラックの――指摘のほうが、正しいといわなければならない。

ただし、そのような〝関係〟（「大きい」）のカテゴリーと〝性質〟（「白い」「温かい」）のそれとを区別していないことが、コーンフォードを含めて多くの論者が言いたてているように、プラトンの認識の不十分性を示すものであるかどうは、軽々しい断定を許さない重要な問題を内蔵している。プラトンには、もっと別の大きな理由があったかもしれないからである。

しかしながら、目下一括して検討中の三人の解釈に共通する最も大きな問題点と私に思われるのは、彼らがいずれも前述のように、「変化・不変化」（小さくなる、ならない）の正しい意味の基準を①「ソクラテス自身の大きさは一定のままで変化しない」ということのほうに置き、ソクラテスについての述定そのものとしてはこれと衝突する②の意味での「変化する」（小さくなる）を、この基準に照らして斥けていることである。②の「ソクラテスが一年後にテアイテトスより小さくなる」という事態を、（『パイドン』的な〝内在性質〟の考えにもとづいて）ソクラテスの身に起った「変化」としてとらえることの誤りを、①の明白な事実をつきつけることによって明るみに出すことがこのパラドクスの狙いなのだというのが、彼らの解釈の基本であった。

たしかに常識的には、①で語られる「変化しない」（小さくならない）という認定は絶対的であろう。しかし少なくとも当該箇所のテクストそのものは、右のような解釈を支持しない。むしろ逆に、そのような見方をはっきりと禁止しているのではないか。

なぜならば、①の「ソクラテス自身の大きさは一定のままで変化しない」ということは、いうまでもなく、ソクラテスが他との関係を抜きにして単独に「これだけの大きさである」と同定できるような、彼自身に固有の性質をもっていることを前提としているが、しかるにこのような前提こそ、この箇所の最初に「（ほんとうはそうではないが）かりに……としたら」（εἰ……γε）という反事実的（アンリアル）な想定として導入されたものにほかならないからである。

すなわち、前章で見られたように、この箇所の直前の知覚論において、いかなるものも他と無関係にそれ自体であるのではないという大原則が、「白い」を例とした知覚的性質について適用確認された。そこで、かりにこの認定と相反する前提を立てて、もし（ほんとうはそうでないのだが）「あるものがもともとそれ自体として特定の性質（〝大きい〟〝白い〟〝温かい〟等）のものである」〔＝前章の（1）〕としたらどのような問題が生じるかを見よう、という仕方でこの箇所の議論は始められていた。そして、これも前章で見られたように、背丈比べのパラドクスの記述における「私がこれだけの大きさであるとして」（ἐμὲ τηλικόνδε ὄντα）という条件（1″）は、明らかに、この最初の反事実的前提（1）と対応しているのである。

こうしたテクスト上の事実は、疑いもなく、パラドクスの形で並置された①「ソクラテス（自身）はより小さくならない」（大きさの点で変化しない）と②「ソクラテスは（テアイテトスよりも）小さくなる」（大きさの点で変化する）のうち、①はもともと事実に反する前提に依存しているがゆえに、実際には斥けられなければならないことを告げている。けだしこのことは、このパラドクスの提示がプロタゴラス的相対主義にもとづく知覚論を承けるものであ

ったことを思えば、当然の帰結というべきであろう。したがって、これと逆に①で語られる「変化しない」（小さくならない）の意味を絶対の基準としてこのパラドクスを解釈するジャクソン、コーンフォード、ロスたちの解釈は、少なくともこのパラドクスについてテクストそのものに語られている事柄の解釈としては、その指示するところと真向から相反する以上、根本的に間違っているといわなければならない。

ただし、プロタゴラス的立場から帰結するこの常識の逆転についてのプラトン自身の見解と立場はどうであるか、また、『パイドン』（102B～103A）との比較が告げていることのほんとうの意味は何か、といった問題に関しては、あらためてまた慎重に考察しなければならないであろう。

（b）R・S・ブラックの解釈

さて、前述の三人とはまったく異なった解釈を提出するのがブラック[12]である。「この箇所のポイントは、（『パイドン』の考えが捨てられていようといまいと）事物における内的変化の不在というようなことではなくて、単純に、あらゆるものは変化すること――関係を変えることによってさえ変容を受ける（they are affected even by changing relationships, 154b）ということである」（p.8）。このことにもとづいてブラックは、②の「ソクラテスが一年後にテアイテトスより小さくなる」という事態を、ソクラテスの身に起こる本ものの「変化」と認定し、まさにその点にこのパラドクスの意図を見ようとする。

これまでにテクストに即して確認されたこの箇所の議論の筋道に照らして、ブラックのこの捉え方は正当であり、先の三人の解釈とくらべて大きく前進しているといえる。しかし一応、その論述の中身を見てみよう。

――〝六つのサイコロ〟や〝ソクラテス〟（すなわち、テクストで言われる「測りくらべる側のもの」）は、サイコロの数やソクラテスの背丈が増減しないにもかかわらず、実際に一種の変化をこうむるのである（*do* undergo change of a sort）。すなわち、異なった比較がなされるときに、それぞれ異なった仕方で変容を受ける（“affected”＝*πάθοι*, 154B）

のであり、そのことによって別のものになる（より多く、より少なく、より小さくなる）のである。「多」「少」や「大」「小」だけでなく、「温かい」「冷たい」や、さらに「善い」「美しい」(157D) についても同様である。「善い」と思われていたものは、新たな比較の相手を与えられることによって（いわば違った光の中に置かれることによって）、「悪い」と思われることになる（あるいは、「悪い」ものとなる）。

ソクラテスが背丈を減じないのに小さく「なる」ということをそのような仕方で説明するのが、パラドクスの意図である。すなわち、新たな比較、もしくは関係の変化（a change of relationships）はソクラテスを *affect* する、ということである。この affection は、背丈が減じるのとは違った種類の変化ではあろうが、にもかかわらず、それはひとつの変化なのである。「測りくらべる側のもの」がそのことによって変化するのだという理論は、このパラドクスを説明する。——

以上がブラックの主要論点であるが、彼は、こうした change in changing relationships を説くこの箇所の議論が、きわめてまじめな意図のもとに行なわれていること、プラトン自身によっていかなる仕方によっても斥けられていないことを強調している。

はじめに言ったように、ブラックがこのように②で語られる「変化」（小さくなる）をソクラテス自身の身に起こる真正の変化として強調したことは、テクストに示されるこの箇所の論旨とよく合致する。この点をこれほどまでに明確に表明したのは、私の知るかぎり、数多くの解釈者のなかでブラックただ一人であり、高く評価されてよいであろう。しかしながら、いま見られた彼の論述の仕方によく注意してみると、そこには重大な不十分性が伏在していることもまた、明らかではあるまいか。

ブラックによれば、②で語られるソクラテスの「変化」——比較の相手が変ることによる変化——は、あくまで「一種の変化（change of a sort, p.8）であり、「背丈が減じるのとは違った種類の変化であるかもしれないが、にもか

かわらず、それはひとつの変化である」(“though this affection may be a different sort of change from losing height, it is nevertheless a change,” p. 9) とされている。すなわちブラックは、②で語られる「変化」をひとつの変化として積極的に認定しながら、他方それと並んで、①を支える「ソクラテス自身の背丈(大きさ)が増減する、しない」という「変化・不変化」の意味もまた、この箇所で同等に容認されているとみなしているのである。

しかし先に確かめられたように、この①の「ソクラテス自身の背丈(大きさ)が一定のままで変化しない」ということは、ここでは事実に反すると判定された前提に依存していて、それゆえに斥けられなければならないというのが、テクストが告げている基本的な指示であった。そしてもともとこの判定と指示は、あらゆるものの流転性と相対性を説く立場からの当然の帰結にほかならなかった。ブラックがそのようなコンテクストの(正当な)指摘強調(“the *point* of the context is …… simply that all things change”, p. 8)にもとづいて、②の意味での「変化」を積極的に解したのであれば、同じそのコンテクストの思想にもとづいて、①の意味での「不変化」を、それを支える前提とともに、当然否定しなければならなかったはずである。この点において、ブラックの解釈は——他の諸解釈とくらべて画期的ともいえる一歩を進めながら——不徹底であり、重大な難点を残しているといわなければならない。

四　パラドクスの意図(2)——'Cambridge' change と 'real' change

これまで諸解釈の吟味検討を通じて明確化された事柄を確認しながら、考察を先へ進めることにしたい。

前章のはじめに、私は次のように述べた。すなわち、問題のパラドクスの提出のされ方そのものから見るかぎり、ここでは、ソクラテス自身の背丈に着目した①の意味での「不変化」(小さくならない)と、成長するテアイテトスとの比較に着目した②の意味での「変化」(小さくなる)のうち、最終的にはどちらをほんとうの「変化」または「不変化」として認定すべきかが問われているとしか考えられないのではないか、と。

前章で見た諸解釈は、そのような形での明確な問題意識はないけれども、しかし期せずしてこの問に対するそれぞれの答を提出していた。すなわち、ジャクソン、コーンフォード、ロスは①の意味での「不変化」（小さくならない）を絶対自明とみなして、②の意味での「変化」（小さくなる）を①と突き合わせて誤りと覚らせるのがこのパラドクスの意図であると見た。これに対してブラックは、逆に②の意味での「変化」（change in changing relationships）をほんとうの変化と認定する点にこそ、この箇所のポイントがあると主張したのであるが、他方しかし、①の意味での「変化」「不変化」を、それとは別の種類の「変化」「不変化」としてそのまま容認していた（結果としてブラックは、パラドクスの説明を「ソクラテスはある意味では変化しないが、ある意味では変化する」というかたちで放置したことになる。これでは元の木阿弥であろう）。

こうして、これらの解釈は、ソクラテス自身の背丈（大きさ）に着目した場合の①の意味での「変化」「不変化」を自明として容認せざるをえない常識の根づよさを、まざまざと告げているといえよう。しかし、前章で見られたように、テクストの記述そのものは、「変化」「不変化」（小さくなる、ならない）の意味として①のそれを斥け、②のそれを採用すべきことを指示しているのである。この点はパラドクスの意図を理解する上で特に重要であるから、ここであらためて、そのことの意味をさらに十分に確認しておかなければならない。

まず、この箇所でそもそもの最初（154B）にパラドクスを導入する次のような趣旨の文章の全体が、事実に反することを想定するアンリアルの条件文（εἰ…… ἦν, οὐκ ἂν ἐγέγονει s. ἐγένετο）で語られていることの意味を、もう少し精確に見届けておこう。

（1）　かりにあるもの（x）がそれ自体として何らかの特定の性質（F）のものであるとしたら、

（2）　それ（x）が他のものに出会ったり、他のものが何らかの変容を受けたとしても、

（3）　自分（x）自身が何ら変容を受けないとすれば、

（4）別のもの（F以外の性質のもの）になることはないはずである。

すなわち、この（1）～（4）の文の全体は事実に反する想定を表明しているのであるから、これによって意図されている積極的な主張は、

「しかし実際には、（1）は事実に反するがゆえに否定されなければならないから、（2）の条件（つまり、ブラックの言う changing relationships）が与えられるとき――（3）も（1）の否定に伴って言えなくなる以上――そのもの（x）は別のものになるのである」

ということにほかならない。背丈比べのパラドクスにおける①の否定と②の肯定は、このような仕方で予示されているのである。

では、①の「ソクラテス自身は大きさの点で変化しない（小さくならない）」ということ――この常識にとっては自明の事実――は、もう少し詳しく具体的には、どのような意味で否定されなければならないとされているのであろうか。

背丈比べの記述において、この箇所冒頭の右の反事実的想定文のなかの（1）と（3）にそれぞれ対応するのは、第二章で見られたように、

（1″）「私（ソクラテス）がこれだけの大きさである」

（3″）「私は増大も減少もしない」「私の背丈は何ひとつ引き去られない」

ということであった。この（1″）＝（1）と（3″）＝（3）が事実に反する想定として否定され、したがって①の変化の見方も否定されるということは、事柄の内容に即して言えば、「私（ソクラテス）の背丈」（ἐμὸς ὄγκος）と言われるものを、そのままソクラテスについての「大」「小」の認定における「大」または「小」として語ることに対する否定であり、ひいてはまた、「小さくなること」（ἐλάττων γίγνεσθαι）すなわち「減少すること」（φθίνειν）を、「私の背

丈が引き去られること」としてとらえることに対する否定と拒否にほかならないであろう。[13]

テクストではまた、背丈比べのパラドクスは、三つの同意事項（155A3～B3）――第二章で命題（a）（b）（c）として示したもの――の間の衝突の例として示されていたのであるが、いま見られた否定と拒否の内容は、①を支え、（帰結せしめる）ところの（a）と（b）の内容によっても確かめることができる。――

（a）何ものも、自分が自分に等しいままであるかぎりは、嵩の点でも数の点でも、より大きくなることも、より小さくなることもありえない。

（b）あるものに付け加えられることもなく、引き去られることもなければ、そのものは増大も減少もせず、つねに等しいままである。

（a）＋（b）は、実質的にはやはり、「より大きくなること」（μεῖζον γενέσθαι）と「より小さくなること」（ἔλαττον γενέσθαι）、すなわち「増大すること」（αὐξάνεσθαι）と「減少すること」（φθίνειν）を、「付加」（προσείδεσθαι）と「除去」（ἀφαιρεῖσθαι）によって定義していることが知られるであろう。そしてこのような「付加」と「除去」による定義は、それに（ἐν）付け加えられ、それから引き去られるところの一定の「大きさ」が、他との関係や比較にかかわりなく、それ自体として同定されうるという前提に依存している。①とともに（a）（b）が否定されなければならないということは、「より大きくなること」「より小さくなること」のこのような定義の仕方と、それが依存するこのような前提が斥けられなければならないということなのである。

くり返し言うように、すべてこのような否定と拒否――そして代りに②の意味での「変化」の肯定と採択――は、常識のとらえ方の完全な逆転である。三つの同意事項のうち、前記の（a）（b）と対立して②を支えるのは、

（c）あるものが後になってから、以前にはそうでなかったところのものであるということは、なることやなりゆくことなしには不可能である。

ということであったが、この命題（c）は、P・ギーチが[14]「変化のケンブリッジ・クライテリオン」と名づけた次の命題（G）と実質的に等価であるといえる。

（G）The thing called 'x' has changed if we have 'F(x) at time t' true and 'F(x) at time t^1' false, for some interpretation of 'F', 't', and 't^1'.

ギーチは、この基準（G）によれば、ソクラテスは成長するテアイテトスより小さくなることによって変化することが帰結するだろうが、しかしこのような 'Cambridge' change（Gの基準を充たすという意味での〝変化〟）は、けっしてほんとうの変化（'real' change）ではないこと、だから（G）〔＝（c）〕は「変化」の意味の基準としては不十分であること（'real' change は必ずGの基準を充たす 'Cambridge' change でもあるが、しかし必ずしもすべての 'Cambridge' change は 'real' changeではない）を論じている。ただ、'Cambridge' change を述べる命題のなかから 'real' change を述べる命題を選び出すための基準を提出することは、さしあたって自分にはできないとギーチは言っているが、われわれのパラドクスに即して言えば、前記（a）（b）が述べる「大きくなる」「小さくなる」という変化の「付加」と「除去」による定義が、そのような 'real' change の基準を与えているとみなされるであろう。だからマクダウェルはギーチを承けて、このパラドクスにおける（a）（b）→①と（c）→②との対立はたんに real coming to be と Cambridge coming to be との違いを示しているにすぎないと言い、「しかしおそらくプラトンにはこの違いがはっきりと分っていなかった――少なくともまだ分っていなかったのであろう」（"But it is quite plausible that this difference was not, at least not yet, clear to Plato", p. 137）という認定を下している。

パラドクスにおける①と②との対立についての普通一般の受けとめ方（前述のジャクソン、コーンフォード、ロスの解釈がその例）を、同意事項（a）（b）（c）にまで遡っていくらか厳密に記述するとすれば、右のギーチ（およびマクダウェル）のような論述となるであろう。しかしわれわれがテクストに見たのは、ちょうどこれと逆に、「変化」（小さく

なる）の意味の基準を（a）（b）→①に置くことを斥けて、（c）→②の意味における「変化」（小さくなる）をほんとうの変化（'real' change）として認定すべきことの指示であった。この指示は、「変化」を語るべき二つの観点・基準を完全に明確に区別したうえでの指示であって、そこには、両者の違いに気づかなかったとか、混同したとかいうような推定の余地はまったくないというべきであろう。だから――この帰結は当面プロタゴラス的立場の展開というコンテクストの中で示されているけれども――もし右のマクダウェルが言うように（そしてジャクソン、コーンフォード、ロス、ブラックたちもすべてそう考えているように）このパラドクス提示が何らかの意味でプラトン自身の立場と見解を反映しているとするならば、プラトンにはこのような常識の逆転を裏づけるしかるべき理由と根拠が――マクダウェルその他には "at least not yet clear" であるような理由と根拠が――念頭にあったかもしれないのである。

五　〝常識の逆転〟の再吟味――〝状況〟の変化は〝もの自身〟の変化である

前章の最後に触れた点――プラトン自身の立場との関係の問題――については、いずれ正式の調査と考察を行なわなければならない。さしあたってしかし、その問題とは別に、この箇所のテクストが指示する前述のような「変化、不変化」のとらえ方それ自体について、その意味するところをもう少しよく考えてみよう。前章で見られたような意味においてわれわれはそれを〝常識の逆転〟と呼んだけれども、しかしそれははたして、ほんとうにそれほど非常識な見解であろうか。

たしかに、ソクラテスの背丈そのものが元のままであるにもかかわらず、ソクラテスが大きさの点で変化しない（大きくも小さくもならない）ということを否定するのは、一見して奇妙に思われよう。しかし、仔細に見ると前述のように、同意事項（a）（b）にもとづく①を否定するこの見解は、内容的には、「ソクラテスの背丈」（何センチメートルかの身長）そのものを、そのままソクラテスについての「大きい」「小さい」という認定における「大」または

「小」として語ること、またこれにもとづいて、「大きくなること」「小さくなること」＝「増大すること」「減少すること」を、その何センチメートルかの固有の背丈にいくばくかが「付加」され「除去」されることとして定義することに対する、否定と拒否にほかならなかった。

そしてこのような否定と拒否は、ただ「大」「小」だけでなく、われわれの知覚と経験に与えられるすべての性質・性格（F）について適用されるべきことが意図されていると解された。パラドクスを導入するこの箇所冒頭の反事実的想定文の中では、「温かい」「白い」が「大きい」とまったく同列の例として挙げられていたし、後には（157D）さらにこれらすべて（πάντα ἃ ἄρτι διῆμεν）と同列に、「善い」「美しい」が語られているからである。――では、こうした「温かい」（冷たい）という温感や、「白い」といった色の場合、また「善い」「美しい」といった価値的な性格の場合への適用は、どのようなかたちで考えられるであろうか。

深い井戸の水は、まぎれもなく夏には冷たくて、冬は温かい。しかし井戸水自身の温度は、夏冬を通じてほぼ一定のままである（冬のほうがいくらか低いであろうが、一応一定のままとしておこう）。では、夏から冬にかけて井戸の水は温かさの点で、①′変化しない（より温かくならない）のか、それとも、②′変化する（より温かくなる）のか。――背丈比べの場合について先の①を否定して②を肯定する思想は、ここでも当然①′を否定して、②′を（'real' change として）肯定するであろう。それはこの場合には、摂（セ）氏何度という水の温度そのものを、「温かい」「冷たい」という認定における「温」または「冷」として語ることへの否定と拒否であり、ひいては、「温かくなる」「冷たくなる」という変化を、その摂（セ）氏何度という〝固有の〟温度（数値）が上下することと定義することを否定し拒否する思想にほかならない。（152Bにおいて、同じ風をある人は冷たいと感じ、他の人は冷たく感じない場合、その風が他と無関係にそれ自体で冷たいとか冷たくないとかいうことが否定されていたことを参照。）

色の場合。――白色の電球をともした室内で赤色の電球を点灯すれば、もちろん赤く見える。そのまま次に、白電

球を青色の電球にとり代えて点灯すると、赤色電球の発する色は紫色になるであろう。しかしこれは〝相手〟が白電球から青電球に代っただけであって、赤色電球そのものに着色されている〝固有の〟色（赤）は元のままであるといえる。ではこの場合、赤色電球からの色はほんとうは、①〝変化しない（紫色にならない）のか、それとも②〝変化する（紫色になる）のか。――当然、これまでの諸例についてと同じく、①〝を斥けて②〝を採るべきであろう。そしてこれは、あるものの色とその色の変化の認定において、そのものが標準的な条件下に発する色（例えば赤電球の赤＝波長610～700mμの光線）を絶対的な基準とすることへの否定と拒否にほかならない。条件が変れば、そのものの色は実際に変るのである。（ことさら右のようないくらか仰々しい想定をしなくても、例えば口紅の色は、白昼の光の中と特殊な色の螢光灯の光のもととでは、実際に異なった色となるのであって、その口紅に〝固有の〟唯一の色というものはないのである。）

「善い」「美しい」といった価値については、前章で見たブラックが言及しているように、ある状況の中では「善い」行為であったものが、別の状況の中では「悪い」行為となり、ある環境の中では「美しい」ものが、別の環境の中ではかえって「醜い」ものとなるような場合を、いくらでも挙げることができるであろう。

いま分りやすさのために、一万円札の有する経済的価値というものを考えてみる。インフレが続けば、何年かの間に、一万円という数値で表わされる金額は元のままでも、その価値は事実上減少する。そしてこの場合には、「一万円札の価値」を一万円という金額によって定義したうえで、その額そのものが元のままであるがゆえに一万円札の価値はいかなるインフレの中でも変化しない（減らない）と言い張る人は、むしろその非常識を笑われるだろう。一万円札の価値の 'real' change というとき、真に 'real' であるのは、一万円という数値の金額そのものではなく、その実際の購買力その他であることは明らかだからである。したがってまた、所持金としての一万円に二千円が加わっても、そのことは直ちにそのまま所持金の価値の増大と同じことではない。金額の数値の多少は、価値を測る目安とな

ることはできても、価値そのものではない以上、所持金の価値の増減（変化）を金額の「付加」と「除去」によって定義することはできないのである。

こうして、背丈比べのパラドクスについてわれわれが〝常識の逆転〟と呼んだ思想は、「温」「冷」や色の場合にはそれほど反常識（パラドクス）的ではなくなり、そして（経済的）価値の場合には再逆転して、むしろ健全な常識と合致するように思われる。[15]

おそらく、「大」「小」の場合だけは上述の（a）（b）→①の意味での「不変化」（小さくならない）を斥けて、（c）→②の意味での「変化」（小さくなる）を採ることが著しく反常識的と思われるのは、「大きさ」「小ささ」が温感や色や価値などの〝第二性質〟的なものと違って、周囲の条件や状況に依存することのないそのもの自身の〝第一性質〟的なものとみなされる傾向が、われわれの常識的思考のうちに根づよく存在するからであろう。またそれゆえにこそプラトンも、パラドクス性が最も露骨なかたちで現われる「大」「小」の場合をとくに意図的に選んで、問題を提示したものと思われるのである。

しかし、ロックが〝第一性質〟のなかに数えた「大きさ」とは、正確には「大きさ」（largeness）ではなく「嵩」（bulk）なのであり、この "bulk" は、われわれが「背丈」（身長）とかりに訳したギリシア語「オンコス」（ὄγκος）（字義通りには同じく「嵩」）とぴったり対応する語である。そして、例えば摂氏四度という温度がそれだけでは「温かい」とも「冷たい」とも言えないように、また一万円という金額自体がそのまま価値と同じではないように、例えば一七〇センチという「嵩」それ自体は、それだけでは「大きい」とも「小さい」とも言えない（二メートルを越す身長についてもなお「小さい」という知覚的判別が成立する状況もある）という主張には、それなりの十分な理由があるだろう。ソクラテスの身長（嵩）が元のままであるがゆえにソクラテスは「大きく」も「小さく」もならない（大きさの点で変化しない）、という見方は、何センチメートルという「嵩」（bulk ＝ ὄγκος）をそのまま「大きいこと」「大き

さ」(largeness＝μέγεθος, μέγα)あるいは「小さいこと」「小ささ」と同一視する点に、その反事実性をこの箇所で認定されているのである。

そして、「温かい」「冷たい」や「赤」「紫」などの知覚的性質の判別がそのときどきの各種の条件に依存し左右されて成立するように、知覚的性質としての「大きい」「小さい」という判別もまた、比較の相手その他の周囲の条件に依存し、条件が変れば判別の内容も変るというのが、このパラドクスの提示を通じて打ち出されている思想である。「変化、不変化」の認定においてもまた、先に温感や色彩や価値について見られたのとパラレルな意味で、その人の何センチメートルという身長(嵩)そのものが元のままでも、比較の相手の変動によって実際に変化する(大きくなったり小さくなったりする)という認定が正しいことになる。比較の相手やその他の各種の環境条件を一括して〝状況〟と呼ぶことにして、これを一般化して言えば、

あるものが置かれた〝状況〟の変化こそが、着目された当の性質に関する〝そのもの自身〟の変化であるということになるであろう。これが、さしあたってこの箇所で表明されている思想にほかならない。

「さしあたって」というのは、この思想は本質上、けっしてこの記述のままの形にとどまりえないと考えられるからである。しかしその点の見きわめは後にゆずって、われわれは順序として次に、この思想がプラトン自身の哲学とどのように関わっているかを調べることにしよう。

六　プラトン自身の哲学との関係(1)
――『パイドン』96A～102A との照合

前章でその意味内容を確かめた思想は、これまで再三触れてきたように、額面上はプロタゴラスの立場から帰結する思想として表明されているものであった。パラドクスを導入するこの箇所冒頭の反事実的想定文は、直前に語られたプロタゴラス的相対主義の立場に立つ知覚論を直接承けて、その知覚論の示すところをかりに否定するとどのよう

な問題が生じるかを述べるという形での、反事実的想定文であった。他方また、パラドクスを述べた後のこの箇所の結びの部分でも、「なぜ、プロタゴラスが語っているとわれわれが言うところの言説によれば、これらの事柄がこのようになるのか」(155D 5～6)とはっきり言われている。

では、このパラドクスの扱いを通じて表明された前述のような思想は、プラトン自身の哲学とどのような関係を有するのであろうか。プロタゴラス説そのものは、この『テアイテトス』第一部において、やがてきびしい批判を受けて斥けられることになる。とすれば、前述の思想はあくまで、批判の相手であり後に斥けられるプロタゴラス説の一部にすぎず、プラトン自身の考えとは別のことであって、プラトン自身はこのような見解は採らないと見るべきであろうか。それとも、プロタゴラス説は斥けられるとしても、そのすべてが全面的に斥けられたのではなく、知覚理論と直接関係して表明されたこの箇所の思想に関しては、これをプラトン自身の立場とも合致するとみなしてよいのであろうか。

これは、一般にプロタゴラス説やヘラクレイトス的流転説に対するプラトンの態度は正確にどのようなものであるか――全面的な否定・拒否なのか、それとも部分的には受容・摂取があるのか――という、『テアイテトス』第一部全体を通じての論争多き大問題の一部である。これに十全なかたちで答を提出するためには、プロタゴラス説とヘラクレイトス的流転説の批判において実際に何がどのように批判されているかについての、入念詳細な調査をまたなければならない。しかし、前章までにその輪郭を見定めたこの箇所の思想について、一応それだけ単独にプラトン自身の哲学との関わり合いを探ることはできるであろう。すでにわれわれは第一章において、プラトンが一見単純なこのパラドクスに内包される問題に対して、重大な関心を寄せていることを告げるような対話人物たちの言葉を見た。

先にその解釈を批判的に検討したジャクソン、コーンフォード、ロスはいずれも、プロタゴラス説の名のもとに語られるこの箇所にプラトン自身の考えが表明されていることを疑わず、その立場から、類似の問題が扱われている

『パイドン』102B～103A をこの箇所と比較して、プラトンの考えの推移もしくは前進を見ようとした（本稿第三章（a））。彼らの解釈は、何よりも『テアイテトス』のこの箇所のテクストが語り指示するところと根本的に相反するがゆえに、われわれはこれを斥けなければならなかったのであるが、しかしこの箇所を『パイドン』102B～103A と比較すること自体は、そこで類似の問題が扱われている以上、十分意味のあることであろう。われわれもまた、すでに彼らの解釈の批判を通じて確認された諸点をふまえながら、この比較がほんとうに告げる事柄はどのようなことかを、われわれ自身の目で調べなければならない。

しかしながら、この箇所における前述の思想がプラトン自身の哲学とどのような関わり合いをもっているかをたずねるためには、同じ『パイドン』でも、もっとその前に着目してしかるべき箇所があるように私には思われる。

周知のように『パイドン』では、イデア論の前提の確認の上に立って始められる前記の箇所の議論（102B～103A）に至るまでに、その当のイデア論がどのような探求と思索の経緯によってかたちづくられたかが、ソクラテスの口を通じてかなり詳しく語られている。それは、若いころ自然研究に熱中したソクラテスが、さまざまの事象の原因（根拠）の探求のなかで疑惑におちいり、考えあぐねた末、アナクサゴラスへの期待と失望をへて、最後に「ロゴスにおける考察」のもとに、イデアをもって原因（根拠）とする考えによって決着をつけるに至るプロセスであった（96A～102A）。いま着目したいのは、このプロセスのなかでソクラテスが、実際にどのような問題についてのどのような疑念に促されてこのイデア原因説に到達したと語られているか、という点である。

ソクラテスが原因（根拠）――「なぜ」「何によって」――の探求において考えあぐね、「以前には知っていると思っていた事柄までも、さっぱりわからなくなってしまった」と述懐しているのは、例えば次のような問題であった。まずとくに、「人はなぜ成長・増大する（大きくなる）か」（διὰ τί ἄνθρωπος αὐξάνεται）ということ。

「むろんこんな問題は、誰にでもわかりきったことだと、それまでぼくは思っていた。要するに、食べたり飲んだりするからだとね。つまり、食物をとることによって、肉には肉が加わり、骨には骨が加わり、その他同じように、他の部分にそれぞれ固有のものが付け加わって、かくしてそのとき、小さかった嵩がのちには大きくなり、そしてまさにこのようにして、小さな人は大きな人となるのだ、と。こうそのときは思っていたのだった」(96C～D)

また、次のような背丈比べの問題がある。

「誰か大きな人が小さな人のそばに立っているとき、その人は頭ひとつだけ(頭ひとつによって)より大きいのだと見えたならば、そう思うことで十分だと考えていた」(96D～E)

あるいは、もっと明白な例として、

「一〇が八よりも多いのは、二がそこに付け加わっているからであり、二尺が一尺よりも大きいのは、前者が後者を半分だけ超過しているからであると、こう思っていた」(96E)

しかしながら、原因(根拠)についてのすべてこのような考えの自明性はやがて崩壊して行った。そこに立ち止まってまともに考えてみると、ソクラテスには、どうしても納得できなくなったのである。例えば右に言われているように、ある人が他の人より「頭ひとつだけ」(頭ひとつによって)大きかったり小さかったりするというのであれば、より大きいものが「より大きくある」のも、より小さなものが「より小さくある」のも、どちらも同じものを原因(根拠)としてそうあることになってしまうではないか。それにまた、頭それ自体は小さなものであるのに、より大きい者が、小さなものによって大きくあるというのは奇怪ではないか(101A～B)、等々。

イデア論(イデア原因説)とは、すべてこのような問題と疑念に対する、ひとつの態度決定として出てきたものである。すなわちこれらについての、右に引用したような説明方式の自明性を疑ってこれと訣別し、代りに、これらす

べての例を通じて、

「すべて他とくらべてより大きいものは、他の何によってでもなく、ただひたすら〈大〉によって大きいのであり、〈大〉というこの原因（根拠）によってこそ、より大きくあるのだ。また、より小さいものは、他の何によってでもなく、ひとえに〈小〉によって小さいのであり、〈小〉というこの原因（根拠）によってこそ、より小さくあるのだ」（101A）

という安全確実（ἀσφαλές）な思考に固執することによって成立するのである。

むろんこのような態度決定は、「大」「小」の問題に限られるのではない。例えば「美しい」ということについても、

「もし誰かがぼくに、あるものがなぜ美しいかを説明して、はなやかな色彩をもっているからだとか、ある形態をもっているからだとか、その他何であれ、そうした種類のことを原因として挙げたとしても、ぼくはそんなものには別れを告げる」

と言われて、代りに、

「〈美そのもの〉のほかに何かが美しくあるとすれば、それはただ〈美そのもの〉を分有するがゆえに美しいのであって、他の何によるのでもない」

「すべて美しいものは、〈美〉（そのもの）によって美しい」

ということを、「単純に、無技巧に、そしておそらくは愚直に」主張する旨が表明されている（100C～D）。

さて、『パイドン』において語られているイデア論（イデア原因説）の形成過程が以上のような内実のものであるとすると、われわれはそこにひとつの重要な事実に気がつくであろう。すなわちそれは、この過程のなかでソクラテスが当初自明と信じながら、やがてきっぱりと拒否するに至る説明方式が、われわれの『テアイテトス』の箇所においてその拒否が指示されていた把握方式――前述した（a）（b）の同意事項にもとづく①の「小さくなる、ならな

い」のとらえ方――と、同根・同質の考え方にほかならない、という事実である。

『パイドン』で斥けられている説明方式とは、右の引用に見られたように、人が「成長・増大する」(αὐξάνεσθαι)すなわち「大きくなる」(μέγα γίγνεσθαι)のはなぜかという問に対して、それは元からある〝嵩〟への「付け加わり」(προστίγνεσθαι)によるのだと答え、ある人が他の人より「大きくある」(μείζων εἶναι)のは、頭ひとつ分の背丈の差によってである(同様に、一〇が八より「多い」のは二が「付け加わっていること」προσεῖναι によってである)と説明するような説明方式である。他方『テアイテトス』の当該箇所で斥けられるべきとされた前述(a)(b)→①の把握方式も、これとほとんど寸分違わず、「大きくなること」=「増大すること」と「小さくなること」=「減少すること」を、元からの固有の背丈(嵩)にいくばくかの背丈(嵩)が「付け加えられること」(προστίθεσθαι)と「引き去られること」(ἀφαιρεῖσθαι)としてとらえるような考え方であった。

そして、一見自明なこうした考え方が斥けられるのは、『パイドン』においても『テアイテトス』においても、「頭ひとつ」分といった長さの差や何センチメートルと測られる身長そのものは本来、「大きい」「小さい」という当のあり方とその認定に関しては、ニュートラルであるはずであり、元からの身長(嵩)にいくばくかの長さ(嵩)が付け加わったり引き去られたりすることは、「大きくなる」「小さくなる」ということそのことと同じではない――あるいは、そのほんとうの根拠たりえない――と考えられたからである。それは、例えば摂(セ)氏何度という温度をそのまま「温かい」「冷たい」という認定における、ひいては「温かくなる」「冷たくなる」という変化の認定における、「温」または「冷」として同定することができない(第五章参照)のと同様であり、あるいは『パイドン』の例で言えば、「はなやかな色彩」や「かくかくの形態」がそのまま「美しいこと」そのことと同じではない――その真正十全の根拠ではありえないのと同様である。

「大きい」「小さい」(そして「大きくなる」「小さくなる」)ということにしても、「温かい」「冷たい」(そして「温かく

なる」「冷たくなる」ということにしても、また「美しい」（そして「美しくなる」）ということにしても、そのこと自体のためには、長さや温度や色彩・形態などとは別種の、独立の説明原理（根拠）が要求される。そのような説明原理（根拠）として、『パイドン』では、「〈大〉そのもの」「〈美〉そのもの」といったイデアが立てられた。他方、プロタゴラス説の名のもとに語られる『テアイテトス』の当該箇所の論述は、むろんそこまでは踏みこんでいない。しかしいずれにしても、そこで事実に反する想定の上に立つものとして斥けられているのが見られた①の「小さくなる、ならない」のとらえ方とは、もともとイデア論がまさにそれに対する拒否の態度決定によって成立したところの説明方式と、同根・同質のものにほかならないことは間違いないのである。とすれば、これと対置された「〝状況〟の変化こそが、着目された当の性質に関する〝そのもの自身〟の変化である」という、前章でわれわれが確かめた思想を含めて、このパラドクスの箇所の論述の内容全体は、けっしてプラトン自身の立場と無関係な、たんにプロタゴラス説からの帰結というだけのことにとどまりえないであろう。それはプラトン自身の哲学にとって、たとえ『テアイテトス』におけるイデア論の消息がどのようであるにしても、きわめて重要切実な意味をもっていると考えなければならない。プラトンはここで事実上、もともとイデア論が生まれてきた思考の筋道を、新たな手続きの中で振り返り見ていることになる。

七　プラトン自身の哲学との関係（2）
――『パイドン』102B～103A との照合

以上の事実を見とどけたうえで、次に、ジャクソン、コーンフォード、ロスたちが着目した『パイドン』102B～103A の箇所に目を向けてみよう。この箇所は、前章で見たイデア論への到達過程についての記述（96A～102A）につづいて、そのようにして到達されたイデア論の考えを

「ひとつひとつの形相（イデア）がたしかに存在し、他のものはそれを分取することによって、その形相（イデア）

と同じ名前をもつようになること」(102B)

という同意事項として確認したうえで、例えば「〈大〉そのもの」といったイデアと別に、「われわれの内にある〈大〉」といったいわゆる〝内在性質〟の観念を導入することになる。このことによって意図されるのは、魂の不死性の最終証明への狙い定めのもとに、「ただ〈大〉のイデアそのものだけでなく、〝われわれの内にある〈大〉〟もまたけっして〈小〉を受け入れない」という論点の確立であった。むろん、このような問題連関のなかで取り上げられるのは、「大」「小」といったいわゆる〝関係的〟な性質だけではない。少し後では(103C sqq.)「温」「冷」や「奇数性」「偶数性」が例として語られているように、一般に反対的な性格(τὰ ἐναντίον, 103B)のすべてについて同じ論点が適用されるのである。

ただこの議論のなかで、すでに見られたように(第三章の(a))、

x(例えばシミアス)はy(ソクラテス)より大きく、z(パイドン)より小さい

という事態は、

xの中に、(yのもつ〈小〉との関係における)〈大〉と、(zのもつ〈大〉との関係における)〈小〉とが内在しているということを意味していると語られていて、大・小の比較についてのこのようなとらえ方が、『テアイテトス』で示された背丈くらべのパラドクスとの関連において注目されたのであった。

この点を論じたジャクソン、コーンフォード、ロスたちの見解を、すでにわれわれは詳しく検討して斥け、またその検討・批判を通じて、『テアイテトス』におけるこのパラドクス提示の意図とその思想の基本をテクストにもとづいて確認した(第三章、第四章)。そうした調査と考察の結果をふまえながら、いまわれわれはあらためて、『パイドン』で表明されている右のような考えの、とくにどの点がどのような意味において『テアイテトス』のパラドクスの意図と思想に関わり合いをもっているかを、われわれ自身の目で見定めなければならない。

われわれが確かめたところでは、『テアイテトス』のパラドクスは、「ソクラテスはいまテアイテトスより大きいが一年後には小さい」という事態について、

①ソクラテス自身の背丈は元のままである以上、ソクラテスは大きさの点で変化しない（小さくならない）

という見方を常識に反して斥け、

②比較の相手テアイテトスの成長によってソクラテスは大きさの点で実際に変化する（小さくなる）

という見方を採るべきことを指示していた。①を斥ける思想に立ち入ってみると、それは『パイドン』（96A～102A）に述べられるイデア原因説の形成過程の中で決定的に働いたモチーフと軌を一にするものであることが、前章において見られた。では、『パイドン』のそれに続く箇所（102B～103A）で表明されている右のような考えは、それだけを取り上げてみると、この①と②の見方のどちらと本質的なつながりをもっているであろうか。

同箇所が述べている〝内在性質〟の考えというのは、それぞれのイデアそのもの（Φ）と、事物に直接内在する性質（F）と、その性質をもつところの――あるいは、その性質がそこに内在するところの――当の事物（x）と、この三つのファクターを区別して（cf. 103B）、知覚される性質を「xの内にあるF」としてとらえる考え方にほかならない。「（より）大」「（より）小」といったいわゆる〝関係的〟なものもまた、この原則に従って、「xの内にあるF」の一つの場合として扱われるわけであるが、この点はすでに述べたように、『テアイテトス』の当該箇所と比べて「大」「小」の関係的（πρός τι）な性格の認識が欠落または不十分であった（ジャクソン、ロスの主張）ということではなく、むしろその〝関係的〟なあり方そのものはより露骨に表明されているといえるのであって、ただ右に見られたように、「大」「小」がそうした「……との関係（比較）における」という明確な限定を伴ったまま、全体がそっくり〝担い手〟としてのx（例えばシミアス）の内にいわば閉じこめられ、内在化もしくは局在化されるところに特色があるのである。

『パイドン』に見られる〝内在性質〟の考えの内容がこのようなものであるとすれば、それは本来、『テアイテト

ス』のパラドクスの箇所で採択が指示されている先の②の見方と基本的に相容れない把握方式であるということに、われわれはまず注意しなければならないであろう。なぜなら、②の背後にあってこれを支える知覚理論によれば、「大」「白」「温」といった性質はいかなる特定の場所にも――知覚する〝主体〟の内にも、知覚される〝対象〟の内にも――内在（局在）するものではなく、いうなれば両者の「中間」に、そのときどきの状況に応じて生じるものとされていたからである。つまり、②の見方は、そうした知覚的性状を特定の事物の内に局在化し、「xの内にあるF」としてとらえることを、根本的に拒否する思想の上に成立している見方なのである。

では他方、同じこの〝内在性質〟的把握方式は、『テアイテトス』のパラドクスにおける①の見方とは、どのように関わり合っているであろうか。

この把握方式のひとつの特質は、「（より）大」「（より）小」といった〝関係的〟なものを含めてすべての知覚的性状を、まさに「xの内にあるF」としてとらえるというそのことによって、必然的に、Fがそこに内在しFの〝担い手〟であるところの〝x〟（あるいは、「xはFである」というときの主語となる存在である〝x〟）への着目を伴っているということである。そして、背丈くらべが関係する「大」「小」の場合、いったんそのような〝x〟（『パイドン』の例で言えば〝シミアス〟）への着目が喚起されるならば、常識は、その〝x〟（シミアス）が本来もっている内在性質としては、比較の相手によって変動するような「（ソクラテスとの比較における）〈大〉」「（パイドンとの比較における）〈小〉」といったものよりも、シミアス自身の固有の〝大きさ〟とみなされる彼の背丈・身長のほうを、より優先的に考えざるをえないであろう。『パイドン』の当該箇所に対する注釈家の次のようなコメントは、いみじくもそのことを示している――

「実際にはしかし、シミアスの中に内在している形相〔内在性質〕は、ソクラテスおよびパイドンとそれぞれ比べた場合の〔〈大〉〈小〉という〕二つではなく、比較の相手が誰であっても不変のままである彼の背丈だけである」

("Simmias does not in fact contain two forms which he presents to Socrates and Phaedo respectively, but only one (relevant) form, namely *stature*, which remains unchanged whatever bystanders there may be")(16)

性質（F）の〝担い手〟〝主体〟としての〝x〟への着目を伴う『パイドン』的〝内在性質〟の把握方式は、いやおうなしにこのような見方を促すのである。このような見方は、これをわれわれの『テアイテトス』の問題場面に移せば、テアイテトスとの比較とは無関係にソクラテス自身の背丈・身長に観点を置いた①の見方へと、そのまま直結することは明らかであろう。『パイドン』の設定はシミアスとソクラテス・パイドンとの同時比較であったが、『テアイテトス』のパラドクスの場合は、時間をおいたうえでのテアイテトスとの比較であり、その間を通じてソクラテスの大きさは変化したかどうかが問われているために、それだけ一そう、時間の経過を通じて存続する〝主体〟〝担い手〟（x）としてのソクラテスがクローズアップされ、ひいては、大きさに関するその〝本来の内在性質〟として彼自身の背丈・身長に着目する見方と結びつきやすいといえる。しかし、これまで繰り返し述べてきたように、そのような見方はこのパラドクスの箇所では、はっきりと斥けられていたのであった。

このようにして、『パイドン』102B～103A に見られるいわゆる〝内在性質〟の把握方式は、内容に立ち入って検討してみると、その基本的な性格と特質において、『テアイテトス』のパラドクスにおいて拒否が指示されている①の見方と結びつき、採択が指示されている②の見方と相容れない把握方式であるといわなければならない。

したがってまた、もしジャクソンやコーンフォードたちが論じたように、この把握方式が『テアイテトス』のこの箇所では捨てられ斥けられているとすれば、それはけっして彼らが言うように、この把握方式が〝ソクラテス自身の内的変化〟という帰結――彼らが自明的に正しいとみなす①の見方と抵触・矛盾する帰結――をもたらすがゆえに捨てられたのではなく、逆に、一見自明な①の見方の拒否と共に、それと結びつきそれを支える把握方式として捨てられ、斥けられていると考えなければならないであろう。そしてたしかに、「ソクラテスはいまテアイテトスより大き

いが一年後には小さい」という事態を〝内在性質〟的把握方式の適用によって解釈すれば、ソクラテスは〝内在性質〟の交替という意味で内的に変化する（小さくなる）という帰結になるけれども、しかしこれはけっして『テアイテトス』のこの箇所で示されている②の見方と同じではないことにも、注意しておかなければならない。②の見方は上述のように、「x（ソクラテス）の内にあるF（大、小）」という把握そのものの拒否の上に成立しているからである。

――さてしかし、前章以来進めてきた『パイドン』との照合をふり返ってみると、われわれの調査結果は奇妙な事実を告げているのではないか。『テアイテトス』のパラドクスが示す思想は、①の見方をその常識的自明性に反して斥ける点において、『パイドン』96A～102Aに詳しく述べられているイデア原因説の思想と完全に重なり合うものであることが、前章で確かめられた。しかるに、『パイドン』の続く箇所（102B～103A）で同じイデア論の延長線上に表明されている把握方式は、逆にその①の見方と結びつくような性格のものであることがいま見られたのである。これはまことに奇妙なことといわなければならない。

八　イデア論内部の不整合の照らし出し――「分有」用語の記述方式

もう一度問おう。――われわれは、『テアイテトス』のパラドクスにおいて指示されている、①の見方を斥けて②の見方を採る思想が、プラトン自身の哲学にとってどのような意味をもっているかをたずねながら、同種の問題が重要な場面で現われる『パイドン』の思想との関わり合いを追求してきた。その結果、まずくっきりと浮び上ってきた事実は、『テアイテトス』の当該箇所で斥けられている①の見方は、もともとイデア原因説がそれに対する拒否の態度決定によってこそ成立したところの説明方式と、寸分違わぬといえるほど同質のものであるということであった。①の見方とは、ソクラテスの身長（〝嵩〟）をソクラテス固有の〝大きさ〟とみなし、「大きくなる」「小さくなる」（増

大、減少）ということを、元の身長にいくばくかが「付け加えられること」「引き去られること」として定義するようなとらえ方であったが、『パイドン』（96A～102A）によれば、イデア論は、このような考え方の常識的自明性が、疑いによって突き崩されたところに開示される思想だったのである。

ところが、『パイドン』でそれに続いて語られたいわゆる〝内在性質〟の考えは、逆にその当の①の見方と結びつく（そして②と相容れない）ような把握の方式であった。われわれが別々に検討した『パイドン』の二つの箇所（96A～102A, 102B～103A）は、もともとテクストでは、同じイデア論の思想を展開する一続きの議論をなしているのであるが、『テアイテトス』で提示された①の見方に対して、それぞれが逆の反応を示すのである。このことは、『パイドン』におけるイデア論の内輪の問題としていえば、イデア論の枠内で語られる考えが、当のイデア論によって一度根本的に拒否された物の見方をふたたび帰結せしめる傾向性をもっていること、その意味において、イデア論の前提の下に表明される把握方式が、イデア論本来の立場とそぐわないものをもつということにほかならない。『パイドン』における一連の論述を追っているときにはおそらく気づかれないこのような事態が、『テアイテトス』のパラドクスとの突き合わせによって、あらためて照らし出されるのである。

しかし、どうしてこのような奇妙なことが起こったのであろうか。――いま『パイドン』のテクストに看取される事実に即してこの問に答えるとすれば、それは、上述のような態度決定によって成立したイデア論が、「原因」論の正式の記述に入ってから（100C以降）、「分有」（または「分取」）の用語による記述方式を採用していることから由来している、といえるであろう。その最初のそして典型的な例は、先に第六章において引用した、「〈美そのもの〉のほかに何かが美しくあるとすれば、それはただ〈美そのもの〉を分有する（メテケイン）がゆえに美しいのであって、他の何によるものでもない」（100C）という文章に見られる。もうひとつの、「すべて美しいものは〈美〉によって美しい」「より大きいものは〈大〉によってより大きい」といった簡単な言い方は、前後で一貫して用いられていること

の「……を分有（分取）することによって」という言い方[17]（上記 100C5 のほか 101C3,4,5 そして次の 102B2）を簡略化した表現とみなすことができる。

そして、問題となった〝内在性質〟の箇所も、前章初めの引用に見られるように、「ひとつひとつの形相（イデア）がたしかに存在し、他のものはそれを分取すること（メタランバネイン）によって、その形相（イデア）と同じ名前をもつようになる」（102B）ということの同意確認によって始まっていた。つまりそこでは、「シミアスはソクラテスより大きく、パイドンより小さい」ということは、「シミアスの中には、（ソクラテスとの比較における）〈大〉と、（パイドンとの比較における）〈小〉とが内在している」ことを意味すると語られていたが、この事態はさらに基本的には、シミアスが〈大〉のイデアと〈小〉のイデアを分取・分有することによって成立しているということが、その前に前提として了解されているのである。われわれはこの記述方式を、全体として次のように記すことができるであろう。

いかなる個物xのいかなる性質Fについても、イデアΦが存在し、その名を受けてxはFと呼ばれる（「xはFである」と言われる）。そして、xはFであるという事態――これは、性質Fが個物xに内在すること、あるいはxがFをもつことを意味するが――この事態は、xがイデアΦを分有・分取することによって成立する。

イデア論が表明されるプラトンの中期著作『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』において、イデアと個々の事象との関係を記述する方式としては、このような「分有」「分取」用語によるものと別に、個々の事象（性質）がイデアに似ている（原範型イデアを写した似像である）という言い方を用いる「似像」用語による記述方式があった。これは、『国家』の中心部に展開される「線分」「洞窟」の比喩の論述や、『パイドロス』における壮大なエロース（恋）の物語などの基盤となる記述方式であり、「分有」用語の記述方式とともに、中期イデア論の要所要所で用いられている。[18]「分有」用語方式の場合にならってその骨子を記すと、次のとおりである。

個々のいかなる性質Fについてもイデア Φ が存在し、そしてFは、Φを原物・範型とするその似像・写像であり、

Φの名を受けてFと呼ばれる。

『パイドン』においても、前半部（74D～75B）にこの記述方式が用いられているが、われわれが検討したイデア原因説の正式の記述にあたっては、上述のように「分有」用語による方式が採用されているのである。

「似像」用語によるそれとくらべて、先に示した「分有」「分取」用語による記述方式がもっている際立った基本的特性は、個物xが記述の主語としての重責を担っていることである。このシュンタクス上の基本的特性によって、「分有」「分取」用語による記述方式は、イデアΦを分有し性質Fをもつということに先立ってまず個物xが、その当の主体として確在していなければならないという考えにコミットしているといえる。先にわれわれは、『パイドン』において語られる〝内在性質〟の考えが、『テアイテトス』のパラドクスにおける①の見方と結びつくことを見たが、それは、「xの内にあるF」というそのとらえ方が、性質Fの〝担い手〟〝主体〟である個物xへの着目を伴い、ひいてはまたそのx（例えばソクラテス）が他との関係のいかんにかかわらず有する〝固有の性質〟（ソクラテス自身の背丈、身長）という観念を促すことから由来していた。このことは、この〝内在性質〟の把握方式がもともと「分有」用語による記述方式の中で成立し、その一部をなすものであることによって、個物xの優先的確在ともいうべきその特性を承けついでいるからにほかならないのである。

イデア論のもうひとつの記述方式である「似像」用語による記述の場合は、イデアΦ（原範型）と性質F（似像）との関係だけが述べられて、それ以外に〝x〟への言及を必要としないから、右のような観念を促す「xの内にあるF」というとらえ方が入りこむ余地ははじめからない。個物xが個物xとしてまずあるとされるからこそ、その個物xが他との比較などのあらゆる〝状況〟と無関係な、それ自身に固有の内在性質をもつという観念――前章（七一～七二ページ）で引用したハクフォースの『パイドン』注記に見られるような観念――を招くことになるのであって、このことに対しては、イデア論の記述方式のうちで、「分有」「分取」用語による記述方式だけが責をもつといわなければならない。

こうして、われわれは全体として次のように言うことができるであろう。――『パイドン』96A 以下に述べられるイデア論（イデア原因説）の形成過程の中で決定的に働いたその本来の思考法によれば、何かが「大きくなる」「小さくなる」という事態の真の原因・根拠は、あくまで〈大〉〈小〉そのもの（それぞれのイデア）なのであって、けっして、元からある固有の〝嵩〟への「付加」や「除去」ではなかった。『パイドン』のソクラテスは、後者のような類いの語り方（＝『テアイテトス』における①の見方）をすることに対して、ひたすら「恐れる」(φοβεῖσθαι, 101A5, B2,5) あるいは「警戒する」(εὐλαβεῖσθαι, 101C1) と言っている。しかしながら、そのような態度決定と思考法によって成立したイデア論が、ひとたび「分有」「分取」用語による記述方式によって正式に記述されるとき、「大きくなること」「小さくなること」についてのこの斥けられるべき見方を〝恐れ警戒する〟ことはできても、しかしすべて上述のような意味において、けっして完全に阻止し封じこめることはできないのである。『テアイテトス』に提示されたパラドクスとの照合は、そのことをわれわれに知らしめる。

九　『パルメニデス』――哲学の新たな課題へ

こうしてわれわれには、『テアイテトス』においてなぜプラトンが簡単な、一見パラドクスとさえ思えぬようなパラドクスについて、第一章で見られたような並々ならぬ重大な関心を表明したのかが、しだいに明らかになってきたといえる。このパラドクスにおける①の見方と②の見方の対置は、少なくとも『パイドン』(96A～103A) における一連のイデア論展開のなかに潜在していたある不整合を照らし出すものであったが、それゆえにまた、その点について「われわれ自身を試しながら、あらためてもう一度考察し直す」ことを促すだけの効力を内包しているともいえるであろう。照らし出されたその不整合が告げているのは、「分有」「分取」の記述方式はイデア論形成における根本モチーフを打消す効果をもっていること、したがってもしイデア論本来の思考のあり方が確保されるべきであるならば、

あらためてこの記述方式に対する徹底的な批判的再検討が必要であろう、ということであった。イデア論の性格と内実から考えて、このことはさらに必ずや、人がもちうる哲学的世界観のクルーシアルな分岐点にまでひびいてくるはずである。

さて、まさにこのような事情は、『テアイテトス』の執筆時期までにはプラトン自身の気づくところとなっていた。彼は、『饗宴』『パイドン』『国家』などの中期著作では前述の二種類の記述方式を並用していたが、やがて、これにつづいて書かれた対活篇『パルメニデス』（第一部）において、「分有」「分取」の記述方式に内包される問題点を、イデア論と哲学そのものの根幹にかかわるものとして正面から取り上げたのである。

前章で見られたように、この記述方式においては、個物xの存在が大きな役割を担っていて、したがってまた記述にあらわれるx（この或るもの）とF（性質）とΦ（イデア）の三項のうち、基本的な区別はまず――Fと Φとの間にではなく――一方におけるxと、他方におけるFないし（and/or）Φとの間に引かれることになる。『パイドン』103Bにおいても、〝われわれの内にある〟ところのFと〝本性界における〟Φとが一括されて「（反対的な）性格それ自体」と呼ばれ、これが（反対的）性格をもつ「事物」と区別され対比されていた。

『パルメニデス』において「ごく若い」年ごろと想定されて登場するソクラテスは、エレアのゼノンの「存在が多ならばそれらは似ていて似ていないことになるが、これは不可能」という議論に対して、『パイドン』のそれと同じく「分有」「分取」の用語で記述されたイデア論におけるこのxとF・Φとの区別によって対処した。そして、〈似〉〈不似〉そのものの場合と違って、「私」「あなた」「石」「木材」といった具体的な個々の「何か或るもの」（cf. 129D4 ＝x）についてならば、ゼノンの言う「似ていて似ていない」（一般にFにしてかつ反F）ということは何ら不可能ではないことを示すのに一応成功する（128E～129E）。

しかしながら、「分有」「分取」の記述方式の特質であるxとF・Φとの間の基本的区別が果したこのようなメリッ

トは、先にわれわれが『パイドン』の一連の論述に『テアイテトス』のパラドクスを突き合わせて検証したところを顧みるならば、必ずやまた、イデア論そのものにとっては重大なデメリットともなるはずである。イデア論にとってはより重要な区別であるF（知覚されうる性質）とΦ（思惟されるだけの本性、イデア）との区別が、x（事物）とF・Φ（性質・本性）との間に引かれる基本的な区別の陰にかくれて不鮮明になり、あるいは肝心のイデアΦ（およびΦの分有ということ）がとかく宙に浮くことになるのを、どうしても避けられないだろうからである。[19] 事実、『パルメニデス』の主役パルメニデスが若いソクラテスのゼノンに対する論述ぶりを賞讃しながらも、しかしつづいて次々と提出した質問は、いずれも直接間接に、「分有」「分取」の記述方式にまつわるこのような不都合な事情に関係するものであり、xの存在が突出しxとF・Φとの間の区別が先行することが、イデア論にとってどのような不本意な解釈を招くことになるかを指摘するものであった。

もともと常識にとって、日常語法における主語と述語の区別と対応した「この事物（x）はかくかくの性質（F）のものである」（＝xはFをもつ）という形の事態把握は、ほとんど絶対的な自足性と安定性をもっている。「分有」「分取」の記述方式がxに主語の重責を与えて、FとΦとの間よりもxとF（and/or）Φとの間により基本的な区別を引くことは、主語と述語、事物と性質の区別にもとづく常識のこの安定した見方を、それ自体として半ば認知し公認していることになる。このとき、それをさらに説明するための「xはΦを分有する（分けもつ）」ということは、たちまち「xはFをもつ」へと類同化され、あるいは混同されて解されるのを避けがたいであろう（131A～Eのアポリアにおける「分有する」→「xの内にある」「xがもつ」への置き換え、133B～134Eのアポリアにおける「分有する」と「もつ」との意図的混同）。――他方また、これに対してあくまでイデアΦ（の分有）を「Fであること」の根拠として前面に立てようとするならば、例えば「このものが美しい（美しくある）」ということが〈美〉のイデア（の分有）によって根拠づけられているのと全く同じように、これに準じて、〈美〉のイデアそのものが「まさに美しくある」こともまた、

それ自身がさらに別の〈美〉のイデア（の分有）によって根拠づけられることが必要だと解されることになるであろう（132A～Bのいわゆる〝第三の人間〟のアポリア）。

後者についていえば、先に第六章（六六ページ）で引用した『パイドン』100C4～6の文章は、「美しくあること」が〈美〉のイデア（の分有）によって根拠づけられるのは「〈美そのもの〉のほかの何か（x）が美しくある」場合に限られる（〈美〉のイデア自身については適用が除外される）という条件を明記して、常識のこのような解釈を禁止していた。しかしそれを記述する「分有」の記述方式そのものが、事物と性質の区別（「xはFである」という把握）だけが視野を占有する常識の見方を半ば容認してしまっている以上、イデア論は、すべてをこの「xはFである」という場合を基準として理解するこうした解釈に対して、禁止命令は発しても、実際にこれを防ぎきることはきわめて困難といわなければならない。

若いソクラテスは、こうした点をめぐるパルメニデスの批判的質問に答えることができずに、アポリアにおちいる。しかしこれは、「分有」「分取」の記述方式によってイデア論を提示した若いソクラテスのアポリアであっても、イデア論そのもののアポリアではない。ソクラテスが事態を打開すべく、イデア論におけるもう一つの記述方式である「原範型」と「似像」の関係による記述を新たに提案したとき、パルメニデスが巧みに元の「分有」用語を再導入してこれに置きかえ、それまでと同じ構造の困難の中へ追いこんだ経緯（132D～133A）は、何よりもよくそのことを示している（「原範型」と「似像」の関係による記述を一貫させれば、けっしてここで言われる困難は起こりえない）。プラトン自身がそのように書いているのである。[20]

だからこそ、そのプラトンはまたパルメニデスをして、一連の批判的質問を終えたあとで、もしこれらの困難のゆえにイデア論そのものを捨てるようなことがあれば、人は「自分の思考をどこへ向けるべきかさえもわからなく」なり、「対話・問答の力を全面的に破壊してしまう」ことになるだろう、と語らせたのであった（135B～C）。哲学と思

考そのものの基盤を確保するためには、イデア論を堅持しなければならない。しかしイデア論を堅持するためには、指摘された諸困難を除去しなければならない。

指摘された諸困難とはいずれも、直接間接に「分有」「分取」の記述方式の特性にかかわるものであったから、パルメニデスのこの指示は、先にわれわれが『テアイテトス』のパラドクスを触媒として『パイドン』のイデア論論述の中に検出した不整合が告げていた事柄と合致する。しかし、プラトン自身による正式の検討をへてさらに明確化された重要な点は、イデア論がこの「分有」「分取」の記述方式によって記述されるとき、日常語法の主語と述語に対応した、事物（x）と性質（F）の区別を窮極の基本枠とする物の見方へと巻きこまれ、類同化される――そのときイデアΦは宙に浮く――可能性がきわめて大きいということである。事実そのことは、アリストテレス以来の、そして現代においても依然くり返し現われるイデア論批判のパターンによって、間違いなく実証されてきた。そしてこれと連動して、事物（主語）と性質（述語）の区別を安定自足した基本枠に据えてイデアを締め出す見解のほうは、やがてさらに「実体と属性」「個物と普遍」といった概念群によって装備されつつ、哲学と科学の歴史の中で、「物」的実体を世界の窮極の基礎として措定するひとつの強力したたかな世界の見方へと成長することになる。プラトンがいま自覚するに至ったイデア論内部の不整合の問題はこのように、世界観の方向を決める分岐点に確実にかかわっているのである。[21]

こうして主役パルメニデスは若いソクラテスに問う。「それで君は、哲学についてこれからどうするつもりなのか。これらの問題に答えられない（無知である）ままで、どこへ君は向かおうとするのか？」と。――これは、右のような岐路に立ったプラトンがこれから自分自身に課すべき、哲学の新たな課題へ向けての決意表明にほかならないであろう。

一〇　パラドクスの意味と役割の見定め

さて、対話篇『テアイテトス』は、『パルメニデス』におけるこのような決意表明を承けて、プラトンが哲学の新たな第一歩を踏み出しつつ執筆した最初の著作である。「知識とは何か」というその主題をめぐる考察は多岐にわたっているけれども、少なくとも『パルメニデス』においてプラトンがみずから指摘した上述の問題への抜本的対処という課題が、その射程の中に入っていることは間違いないであろう。すでにわれわれは、「知識とは知覚にほかならない」というテシスを吟味する途上に提示された背丈比べのパラドクスが、その課題と密接に関連する内容を奥行きとしてもっていることを見たのである。いま、本稿におけるこれまでの考察によって得られた諸論点を集成して、このパラドクスが『テアイテトス』の文脈の中で担っている意味と役割を最終的に見定めなければならない。

先に見られたように、問題の「分有」「分取」の記述方式がイデア論本来の思考のあり方を打消す効果をもつことの根本的な誘因は、この記述方式が x（τι, *Phd.* 100 C 4, *Parm.* 129 D 4; πρᾶγμα, *Phd.* 103 B 3）に記述の主語としての重責を与え、あたかもイデアΦを分有し性質Fをもつことに先立って、まずその当の主体となる個物 x が確在していなければならないかのように記述するという点にあった。このことが世界の見方そのものにまで及ぼす先述のような波及効果を思えば、これに対する抜本的な対処は、ただたんにこの記述方式の使用をやめるということだけでなく（事実プラトンはイデアと個別的事象との関係については以後この記述方式を用いなくなるのだが）、そもそもこの記述方式が依拠する〝x〟――性質の担い手となる事物として、「物」的実体の観念につながって行くもの――の哲学的身分・資格を正式に審査して、できればこれを、事象を記述する最も基礎的な場面からは消去してしまうことでなければならない。

第二章で見られたように、問題の背丈比べのパラドクスは、かなり詳細な知覚理論が構築されつつある只中に挿入されていたのであるが、この知覚論はまさにそのような、直接知覚される当の性質（F）そのものとは原理的に区別

された物理的事物（物理的対象）としての〝x〟を、徹底的な相対主義と流転主義との相乗によって最終的には消去する結果となっている。あるいはむしろ、『パルメニデス』で提起された新たな課題の内実を考慮すれば、照準はあらかじめそのことへ定められていたとさえ思われる。この知覚論の最終段階で極力強調されている点は、知覚という事態においてわれわれの感覚器官に対して「働きかけるもの」（事物、対象）も、「働きかけられるもの」としての感覚器官も、知覚の現場を離れてもあらかじめそれ自体で独立に存在するような何ものか（τι）であると固定的に考えることはできない、ということである（157A）。知覚される性質（F）から区別された「石」なら「石」という〝物理的事物・対象〟（x）が知覚に先立って独立に存在し、それがその属性としての「白い」「冷たい」「固い」といった知覚的性質を感覚器官に対してつくり出すのではない。そもそも「石」とはそれら「白い」「冷たい」「固い」等々の知覚的性質の集合にほかならず、あるいは「石」それ自体がひとつの知覚的性質（F）なのであって、「白い」「冷たい」「固い」等々の形容詞的な知覚的性質と何ら認識論上の根本的な身分・資格の差異はない（157B～C）。要するに、あるのはそのときそのときに各人に現われる知覚的性質Fだけであって、これと原理的に区別されるような〝x〟は存在しないのである。[22]

しかしながら、この帰結に至るまでの知覚論の展開は、その途中で一見内容的に無関係なパラドクスの箇所が割りこむことによって、かなり大きく中断されることになっている。何のためにプラトンはそうしたのであろうか。

その点を考えてみるために、まず、この知覚論がどのような手順を踏んで展開されているかを見ておきたい。知覚論全体がのっとる原理は、直前のいわゆる〝秘密の教説〟の箇所において、次の二つのテシスとして示されていた。

（R）すべてについて自体性（αὐτὸ καθ' αὑτὸ εἶναι）を否定するところの相対性のテシス（152D2～3）。――以下これをRテシスと記す。

（K）すべてについて恒常性を否定するところの流転変動性のテシス（152D7～E1）。――以下これをKテシスと

記す。

RテシスとKテシスとは、内容の上で一部オーバーラップするけれども、しかし原則的には区別されていて、パラドクスを挟む前後のそれぞれの部分において次のように、かなり組織的に使われているのが見られる。

A　パラドクス以前の部分（153D8～154A9）

まず簡単に全般的な見通し（153D8～E3）が述べられてのち、Rテシスが掲げられ（153E4～5）、これにもとづいて、知覚される性質がそのときどきのそれぞれの知覚者に対して相対的であることが、色を例として示される。

B　パラドクス以後の部分（155E3～157C6）

必要措置としての、物体主義者（「手でしっかり摑めるもの以外は何ひとつあるとは認めない人々」）の追放・排除（155E3～156A1）。

第一段階（156A2～E7）――出発点（アルケー）としてKテシスが掲げられ（156A4～5）、これを知覚の分析に適用する。

第二段階（156E8～157C2）――ここに来てRテシスとKテシスとの両方が最初に掲げられ（156E8～157A3）、両者の相乗によって先述のように〝x〟の消去が事実上達成される。

さて、A部分とB部分の間に挿入された、老年のソクラテスと成長中のテアイテトスとの背丈比べのパラドクスは、これまでに詳しく確認されてきたように（とくに第三章、第四章）、A部分の帰結をかりに否定したときに成立する①「ソクラテスは大きさの点で元のままであり、小さくはならない（変化しない）」という見方に対して、②「ソクラテスは小さくなる（変化する）」という見方を対置し、①を斥けて②を採るべきことを指示するものであった。

そこで、右に見られたRテシスの適用（A部分）――→Kテシスの適用（B部分第一段階）――→Rテシス×Kテシスの適用（同第二段階）という知覚論展開の構造を顧みるならば、このパラドクスがA部分とB部分の間に置かれること

によって果している役割は、かなり自然に理解されるのではないか。つまりこのパラドクスは、A部分におけるRテシス適用の帰結、すなわち、知覚的性質（F）の各知覚者に対する相対性ということを、さらに広く比較の相手との関係といったことをも含む〝状況〟一般に対する相対性へと拡大一般化したうえで、[23] これを「小さくなる、ならない」といったFから反Fへの変化の問題へと移行させ、次のB部分を主導するKテシスの問題領域へとつなぐ役目を果しているのである。

しかしながら、これだけではまだ、このパラドクスがまさにこの位置に置かれた理由と必然性は一応理解できても、そもそもそれが挿入されたこと自体の理由と必然性を説明することはできないであろう。A部分からB部分への論述の展開は、べつにこのようなパラドクスによる仲介がなくても――あるいはむしろないほうが――滞りなく進行するだろうからである。

しかし、われわれはすでに『パイドン』（96A～102A）との照合によって、このパラドクスにおいて拒否が指示されている①の見方が、イデア論がもともとそれに対する拒否の態度決定によって成立したところの、その当の考えと同じものであることを見届けてある（第六章）。ここでの①の見方に対する拒否は、事実上、イデア論の形成にあたって決定的に働いたその拒否の内実の再提示にほかならないのである。そのことを思えば、プラトンがここにこのパラドクスを挿入したことの積極的な理由として考えられることはただ一つ、目下進められている知覚の分析作業――やがて〝x〟の消去へと至るこの作業――が、本来イデア論のものであった思考のあり方にとってもつ意味を思い起こすということ、でしかありえないだろう。〝状況〟から独立無関係な「ある個物xにもともと固有の性質F」の同定可能性の前提に立って、ソクラテスの背丈そのものをそのような固有の〝大きさ〟（F）とみなす①の見方は、いまあらためて斥けられなければならない。これに対して、そのような前提を払拭し、あらゆる性質Fは〝状況〟と共に成立し〝状況〟と共に変化するとみなす②の見方――われわれが第五章でその思想の全般的な意味を概観したところ

の見方――は、プラトンが一度見定めたイデア論本来の思考のあり方が打消されることなしに成立しうるための基盤を用意する。それはまた、イデア論におけるもう一つの記述方式であった「似像」用語によるそれを、あらためて裏書きするための最初の手続きともなるであろう。

ただしかしそのためには、この②の見方は第五章末で予想として述べたように、最終的には、この箇所で記述された形のままにとどまることはできない。②はいまのところ、「ソクラテスは大きさの点で（あるいは、ソクラテスの大きさは）より小さくなる（変化する）」というように、「ソクラテス」という〝ある個物〟（x）を主語として述べられている。[24] このことは、②を①と並置してパラドクスとして示すという、この箇所の当面の目的のために当然にして必要なことであった。同じソクラテスが（一方において）①小さくならないが、（他方においては）②小さくなる、というように、①と②を同一の主語のもとに揃えなければパラドクスにならないからである。

けれども、これまで見てきたように、すべての禍根はこのような「大きさ」や「小ささ」などの担い手や主体としての〝ある個物〟（x）の容認にあったのであるから、この①と②に共通の主語「ソクラテス」の最終的な身分・資格が次に問われなければならない。むろんこれは、ソクラテスがソクラテスであることが問題なのではなく、〝ある個物〟xとしてのステイタスが最終的には否認されなければならないということである。そして前述のように、まさにそのような〝x〟の消去が――知覚論のA部分の帰結が示された段階においてパラドクスがこの形で示されたうえで――つづく知覚論のB部分において行なわれるのである。そこではまた、〝ある個物〟（x）に対応するような「あるもの」（τι）、「あるものの」（τοῦ）、「私の」（ἐμοῦ）、「このもの」（τοῦδε）、「あのもの」（ἐκείνου）といった語は本来は使用されてはならないことが表明されている（157 B 3～5）。「私の（ソクラテスの）背丈」（τοῦ ἐμοῦ ὄγκου, 155 B 8）とは、最終的な場面では言えないことになるのである。

プラトンがなぜ知覚論の只中にこのパラドクスを、しかもとくにこの位置に挿入したかということについては、ほ

ぼ以上のように考えることができるであろう。プラトンは、直接議論進行の上では先述のような役割をこのパラドクスに与えながら、いずれにしてもしかし、知覚論展開の途中にここでいったん立止まって、世界観の方向を左右する根本問題との関連にみずから注意を向け、そしてその根本問題を能うるかぎり原理的に単純化した形に還元しつくして、パラドクスとして提示したのである。そのことを思えば、第一章で見たようにプラトンが、このパラドクスについて、「ほんとうの意味でわれわれ自身を試しながら、われわれの内に現われたこの問題がそもそも何であるかを、あらためてもう一度考察し直してみるべきだろう」とソクラテスに語らせたことも、またこの箇所を、「哲学の出発点」となる「驚き」（タウマゼイン）についての対話によって結んでいることも、すべて文字通りプラトンの真情として自然に理解できるであろう。

ところで、すべて以上のような事情にもかかわらず、パラドクスの箇所を含めてその前後に展開されている知覚論は、再三注意してきたように、額面上はプロタゴラス説（およびこれと結びつけられたヘラクレイトス的な流転説）の立場からの知覚論であって、当然またイデア論そのものの提示と主張もここではいっさい行なわれていない。『パルメニデス』第一部のエピローグでなされた若きソクラスへの要請(135C～D)は、哲学と思考の成立基盤を確保するためにはイデア論を堅持しなければならないが、しかしそのためには、しばらくはイデア論そのものの主張から「君自身を引き戻し」て、もっと基本的な準備と訓練を積まなければならない、ということであった。この要請に応ずるかのごとく、ここで行なわれているのは、イデア論以前の基礎的な作業――「意図的にイデアのことを伏せて読者にイデア論の必要を知らしめる」（コーンフォード）と言うことさえ正確ではないような、もっと徹底的に基礎的な場面での、一から出直しの作業なのである。

プロタゴラス説あるいは「名の高い人々の考えに祕められた真実」の名のもとに、われわれの最も真接的な経験で

ある知覚という事態を詳細に分析してみせることは、プラトンがそのような作業のためにとった戦略であった。この対話篇でそのプロタゴラス説は、ヘラクレイトス的流転説もそうであるように、やがてきびしい吟味と批判を受けて斥けられることになる。したがって当然、その立場に立った知覚論もまた、十全にして正確な意味ではプラトン自身の知覚論であるということはできないであろう。事実、プラトンが自分自身の立場から正式に知覚論を提示するとすれば、このままの形ではありえないはずである。

しかしながら、問題のパラドクスについてその知覚論が要請する①の見方の拒否と②の見方の採択ということ、そしてそれと関連して、知覚論の最終段階で達成されている〝物理的対象〟――つまりFと原理的に区別されたx――の消去ということに関するかぎりは、それがプロタゴラス説と流転説からの帰結であるとともに、プラトン自身の課題が必然的に要求する帰結でもあったことは動かぬ事実である。そのことは、われわれによる『パイドン』への振り返りと、『パルメニデス』（第一部）で実際に何が行なわれ語られているかの見届けが、疑いを容れぬ明確な事実の線として指し示していたところであった。

各人に現われる知覚的性質（F）がそのまま実在のすべてであるとするプロタゴラス説は、全般的な認識論的・存在論的な立場としては、きびしい吟味を受けて結局は自己崩壊するほかはなかった。他方しかし、その知覚的性質（F）の拠り所（根拠）としてこの世界の内に「物」的実体（x）を立てることは、プラトンにとってプロタゴラス説以上に容認しがたいことであった。だからこそプラトンは、パラドクスの箇所につづく後半部の知覚論の提示にあたって、そのような「物」的実体主義にほかならない立場の人々を「外道の者」（οἱ ἀμύητοι）「無教養の者」（ἄμουσοι）と呼んで追放排除し、当の知覚論を、「それよりもはるかに洗練された人たち」（πολὺ κομψότεροι）の所説と呼んだのである。

事実、相対的・流転的な知覚的性質（F）一元論のその立場は、独立自存のファクターとしての「物」的実体（x）を否定し消去する点において、プラトンにとっていま必要な、いわば洗浄作用をもっている。むしろ、そもそも「プ

ロタゴラス説」（および流転説）とは、そのような洗浄力をもつものとしてプラトンが入念に設定したひとつの立場であったといってよい。ただその洗浄力を、プラトンは意図的に必要以上に強すぎるものとし、xを消し去るだけでなく、知覚される性質(F)そのものが内包しているはずの〃価値〃(有益性)と〃意味〃――これが、あるFがほかならぬFとして知覚されるための最小限必要な根拠である――までをも洗い流してしまうという副作用を与えた。そしてまさにそのような副作用があらわになったところで、「プロタゴラス説」（および流転説）は自己崩壊し、斥けられることになる。

これが、原子論にもつながる「物」的実体主義とプロタゴラス的現象一元主義に対してプラトンがとった、両面作戦の大筋であるように私には思われる。しかしむろん、このことを十分な仕方で査証するためには、全面的に稿を改めなければならない。

註

(1) E. g. Cross and Woozley, pp. 156-157; Kirwan, p. 128; McDowell, pp. 134-135, 136 ("lack of enlightenment about the logic of what may be called 'incomplete predicates'").――なお、それぞれの書名または論文名については、末尾の「文献表」を見られたい（以下同じ）。

(2) Russell, p. 150.――同じく p. 172:（このパラドクスについて）There are, at this point, some puzzles of a very elementary character .....The idea of a relational proposition seems to have puzzled Plato, as did most of the great philosophers down to Hegel (inclusive). These puzzles, however, are not very germane to the argument, and may be ignored.

(3) E. g. McDowell, pp. 134-135: "In each case, if we take care to insert the appropriate 'than' phrase, the results no longer look (to us) like contradiction. This simple (and correct) way of dealing with the puzzles....."

(4) Cf. Cornford, p. 41: "Plato interpolates some alleged puzzles about what we call 'relations' of size and number, whose relevance to their context is by no means obvious."

(5) 文章の主語となっているこの二つの表現は、直前の知覚論との関連において、それぞれ「知覚されるもの」（知覚の対象）

と「知覚するもの」（知覚の主体）を指して言われていると解してよい（cf. Campbell, McDowell ad loc.）。しかし「測り比べる」という言い方はむろん、次に出てくるサイコロの数の比較や背丈比べの例をあらかじめ念頭に置いたうえのものであり、「大きさや数を比較する相手」と「比較を行なう当のもの」（背丈比べの場合でいえば、それぞれ「テアイテトス」と「ソクラテス」）という文字通りの意味でも使われている。後の註（23）を見よ。

（6）ἐμὲ τηλικόνδε ὄντα（155B6）. ―― 田中（p. 219）はこれを「僕がこの齢であって」と訳し、とくに「補注」（pp. 406～407）までつけて、コーンフォードの "I, being of the height you see" という訳を「わざと異を立てたような訳であるが……適切とは言えない」として斥けている。その理由は、「〝このままの丈である〟と〝大きさに増減がない〟というのは同じことの重複であって、相互に説明し合うこともなく、ただ余計な反覆になってしまう」ということである（ただし、コーンフォードの前記訳は「これだけの、この通りの背丈である」であって、「このままの丈である」と書くのはフェアでないだろう）。――そこで私もこの「補注」を無視することなく、率直なコメントを加えておきたい。

τηλικόνδε には「これだけの年齢の」と「これだけの大きさの」という両様の意味があるが、「年齢」でなく「大きさ」の意味に訳しているのはべつにコーンフォードだけではなく、私が見たかぎりシュライエルマッハー（der diese bestimmte Grösse habe）、アスト（qui hac sim magnitudine）、キャンベル（of the height you see me）、マクダウェル（being just this size）、リドル・スコット大辞典（the size I am）などいずれも同じであって、なぜ田中先生がコーンフォードの訳だけを「わざと異を立てたような訳」と攻撃するのかよくわからない。（他方、「年齢」の意味に訳しているのはアーペルト、ディエス、ファウラーなど。フィチーノの訳 "me senem, dum tantus maneo" は「年齢」と「大きさ」の両方にかけているように見える。）

それはともかくとして、はたしてプラトン自身はどちらの意味で書いているであろうか。私としては、このパラドクスの箇所全体に見られるプラトンの入念な問題設定の仕方に注意すれば、ここでは「私がこれだけの一定の大きさである」という条件の表明が不可欠なのであって（これがないと、先のサイコロの例における「六」という数に相当する条件がなくなってしまう）、プラトンは間違いなくその意味で書いているとしか思えない。

本稿でこれから逐一詳しく見られて行くように、この「私はこれだけの大きさである」は、先のサイコロの例における「六つ」という数と同じく、この箇所冒頭の文章における（1）「何らかの特定の性質（大きい、白い、温かい、等）のものである」と対応する条件であり、次の「増大も減少もしない」は、冒頭文章における（2）「自分自身は何も変容を受けない」と対応

する。どちらの条件も問題の構造上不可欠であり、そして前者の条件（これだけの大きさ）があるから初めて「その大きさが増大も減少もしない」と言えるのであって、これはけっして「同じことの重複」「余計な反覆」（田中）ではない（もっとも、「重複」「反覆」と感じられたのはおそらく、先述のように、コーンフォードの "I, being of the height you see" を「このままの丈である」と訳したからでもあろうが）。もしこの「これだけの大きさである」と「増大も減少もしない」をしも「同じことの重復」「余計な反覆」と言うのであれば、同意事項（a）（b）としてテクスト(155A3～9)に明記されている文章の中の「自分が自分に等しいままである」と「増大も減少もしない」もまた、「同じことの重複」「余計な反覆」だということになってしまうだろう。しかしプラトンはそうは考えていないからこそ、両者を共に明記しているのである。

これに対して、「この齢」と訳すことの積極的理由として同じ「補注」（田中）で主張されているのは、「年齢」と「大きさの増減がない」とはそれぞれ独立のことがらを指し、一方が他方の説明にもなるということ、また「僕がこの齢であって」は「君は若いから」とも対応して、説明上必要な意味をもつということであるが、これはテクストのここの二行だけに視野を局限した場合にのみ意味をもちうることでしかないであろう。より広いコンテクストと、提起されている問題そのものの内実を考えるならば、右に述べたように、ここでプラトンが書いているのは疑いもなく、「年齢」のことではなく「これだけの大きさである」ということ――この不可欠の条件――であるといわなければならない。

（以上、重要な点でもあるので、非礼をかえりみず考えるところを率直に述べた。「補注」を無視して全く取り上げないことは、より大きな非礼をおかすことになるからである。）

(7) すなわち、①六つのサイコロは、それ自身には何ひとつ付け加わることも取り去られることもないのであるから、同意事項（a）と（b）によって、「より多く」なることも「より少なく」なることもありえない。②他方しかし、六つのサイコロは、四つのサイコロと比べられる以前にはそうでなかったのに、比べられた後には「より多い」ものであり、また十二のサイコロと比べられる以前にはそうでなかったのに、比べられた後には「より少ない」ものであるから、同意事項（c）によって、「より多く」なり、また「より少なく」なるのでなければならない。

(8) Jackson, pp. 267-268.

(9) Cornford, pp. 41-45.

(10) Ross, pp. 101-102.

(11) Cf. *Categoriae* 4. 1b29, *Metaphysica* Δ14. 1020b9-10.

(12) Bluck, pp. 7–9.

(13) 同様に、サイコロの例の場合は、六なら六という数そのものをそのまま「多」または「少」として語ること、そして「少なく（多く）なること」「減少（増大）すること」を、元からの六という数からの数的除去または付加としてとらえること、に対する否定と拒否である。

(14) Geach, pp. 71–72.

(15) これと通底する事柄は、他のさまざまの場面においてさまざまの形で現われる。思いつくままに幾つかを列挙すると――量子力学において、電子について実験のあらゆる状況（観察装置や観測行為そのものなど）から独立無関係であるような、電子そのものの〝客観的〟な属性・振舞は考えられないこと。科学上のあらゆるデータ（観察的事実）は、すでにそれ自身が「理論負荷的」（theory-laden）であって、いかなる理論＝状況とも無縁中立な〝裸の事実〟（データ）なるものは存在しないこと。もっと卑近な例としては、日本国憲法第九条が、条文そのものは改訂されずに元のままであるのに、長年の間に状況（国民の意識や国際情勢など）が変化したことによって、軍事力の保持について憲法改正が行なわれたのと同じ効果が生じたとする「憲法の変遷」学説の存在。ある時代にわいせつ性を認定された同じ文書が、後の時代（あるいは別の国）では社会状況の変化（相違）によって、わいせつとも何ともみなされなくなること。etc. etc.

(16) Hackforth, p. 155, his italics.

(17) 唯一の例外をなすように思われる100D3～7のソクラテスの言葉については、Fujisawa pp. 44～45＝藤沢 pp. 119～120を見られたい。

(18) 詳しくは、Fujisawa p. 42＝藤沢 p. 116 の調査一覧表と、それについてのコメントを見よ。また、「分有」用語の記述方式がx・F・Φの三項からなるのに対して、「似像」用語の記述方式はFとΦの二項間の関係を記述するものであることについては、Fujisawa p. 52＝藤沢 p. 127, n. (55) を参照。

(19) げんに、ソクラテスはxとΦとの区別を前面に立ててゼノンのパラドクスに対処したが、実は、この対処そのもののためには、xとFとの区別があれば事足りるといわなければならない。なぜなら、ソクラテスが「私（x）は一なるもの（F）にしてまた多なるもの（反F）である」という命題を例にとって実際にやっているように（129C）、xはどの点においてFであり、他方どの点において反Fであるかという、それぞれの観点を特定し指定しさえすれば、あえて「Φの分有」ということを持ち出さなくとも、xとFとの区別だけで、「xはFにしてまた反Fでありうること」の論証は完結してしまうからである。

先に見た『パイドン』102B～Dにおいても、「シミアスは大きく（F）もあり小さく（反F）もある」ということは、それぞれ「ソクラテスとの比較において」「パイドンとの比較において」という観点（関係項）を指定することによって、べつに矛盾であるとはみなされていないし、そしてそのこと自体の説明のためには、とくに「〈大〉（Φ）と〈小〉（反Φ）の分有・分取」という前提事項に訴えることはしていないし、事実その必要もなかったのである。

他方また、これと対比的に若いソクラテスが掲げた「Φそのものは反Φでありえない」という原則は、ΦでなくFについても、同じように成立する。「Fそのものは反Fでありえない」のである。事実まさにそのこと、すなわち「ただイデア（Φ）だけでなく、われわれの内にある当該の性質（F）もまた反対の性質（反F）を受けいれない」ということは、『パイドン』（102D～E）における強調的な論点でさえあった。

(20) この最後の点については、Fujisawa pp. 49～51 = 藤沢 pp. 123～125 を見られたい。また同論文には、本稿で言及したその他の点を含めて『パルメニデス』（第一部）のいわゆるイデア論批判全般について、より詳しく扱われている。

(21) こうした点は、私の『ギリシア哲学と現代』（一九八〇、岩波書店）や「形而上学の存在理由」（『イデアと世界』第二章）において主題的に論じられた。

(22) これがこの知覚論の基本的立場であることは、テクストの全体を素直にまた注意深く読むかぎり疑いえない。違った解釈もあるが、いずれも重要な点においてテクストの記述に違反していることを指摘できる。しかし、そうした他の解釈に対する詳しい批判と反論は別の機会にゆずり、ここでは省略する。

(23) 先に註（5）で触れた、この箇所冒頭の文章の「われわれがそれと測り比べる相手のもの、あるいは触れる相手のもの」（*ἢ παραμετρούμεθα ἢ οἷς ἐφαπτόμεθα*）、また「測り比べたり触れたりする側のもの」（*τὸ παραμετρούμενον ἢ ἐφαπτόμενον*）という言葉は、問題のこのような拡大一般化のために選ばれた表現であろう。

(24) このことは、先に（第四章）②を導く命題（c）と等価なものとして見られたギーチの「ケンブリッジ・クライテリオン」命題に、はっきりあらわれている。——"The thing called '*x*' has changed if we have 'F(*x*) at time *t*' true and 'F (*x*) at time *t*' false" etc.

文献表（本論文において言及されるもの）

Bluck, R. S., "The Puzzles of Size and Number in Plato's 'Theaetetus'", *Proceedings of the Cambridge Philosophical*

Society, 1961.
Campbell, L., *The Theaetetus of Plato*, 2nd. ed., Oxford, 1883.
Cornford, F. M., *Plato's Theory of Knowledge*, London, 1935.
Cross, R. C. and Woozley, A. D., *Plato's Republic*, London, 1964.
Fujisawa, N., "*Ἔχειν, Μετέχειν*, and Idioms of 'Paradeigmatism' in Plato's Theory of Forms," *Phronesis*, 1974.
Geach, P., *God and the Soul*, London, 1969.
Hackforth, R., *Plato's Phaedo*, Cambridge, 1952.
Jackson, H., "Plato's Later Theory of Ideas", *Journal of Philology*, 1884.
Kirwan, C., "Plato and Relativity," *Phronesis*, 1974.
McDowell, J. M., *Plato's Theaetetus*, Oxford, 1973.
Ross, W. D., *Plato's Theory of Ideas*, Oxford, 1953.
Russell, B., *History of Western Philosophy*, London, 1955 (fifth impression).
藤沢令夫『イデアと世界』岩波書店、一九八〇年。
田中美知太郎訳『テアイテトス』（田中・藤沢編集『プラトン全集』第二巻、岩波書店、一九七四年）

（筆者　ふじさわ・のりお　京都大学文学部〔西洋古代哲学史〕教授）

dritte. Dabei vermittelt und verbindet die zweite Dimension die erste und die dritte miteinander. Das besagt zugleich, daß die zweite Dimension den Zwischenbereich von dem Gott und dem Menschen ausmacht, der par excellence geschichtlich bleibt. Der letze Gott, zu dem Heidegger durch sein denkendes Gespräch mit Hölderlin den Zugang gefunden hat, ist der andere Anfang zur Menschheitsgeschichte im Unterschied zum ersten Anfang der durch die Metaphysik bestmmten, bisherigen Geschichte.

Der letzte Gott, der zwar nicht der sogenannte "Gott der Philosophen" ist, ist doch m. E. "ein Gott des Denkenden" geblieben. Er bleibt ein Widerschein des undenkbaren Ursprungs des Denkens auf die Ebene des Denkens.

Change of Situation and Change of Thing: Philosophical Significance of the Puzzles concerning Size and Number in Plato's *Theaetetus*

by Norio Fujisawa
Professor of Occidental Ancient Philosophy,
Faculty of Letters,
Kyoto University

In the course of discussion of Theaetetus' definition that knowledge is perception, Plato interpolates some puzzles about what we call 'relations' of size and number (*Theaetetus* 154B–155D), which have been variously interpreted by commentators. Some regard them as unreal problems due to Plato's failure to understand the nature of relational terms or 'incomplete predicates' (a type of interpretation originating from B. Russell, followed

by R. C. Cross & A. D. Woozley, C. Kirwan, J. M. McDowell, etc.); others consider them, conversely, to be indicating a definite advance of Plato's thought on the relational concepts when compared with his treating the similar problem in the *Phaedo* 102B–103A (H. Jackson, F. M. Cornford, W. D. Ross, etc.).

Rejecting all these interpretations as incompatible with what is stated in the texts concerned, this paper takes the puzzles, in accordance with the way they are presented in the passage, to be expressing the view that (in one of the example cases given there) Socrates *really* becomes smaller when a new comparison with growing Theaetetus is made, in spite of the fact that nothing is taken away from his stature: the latter fact has, in its own right, nothing to do with his 'becoming *smaller*'. This way of looking at the change (e. g. 'becoming smaller'), which is stated in the context as a consequence of the Protagorean theory of perception, may apparently contradict common sense, but in itself it has good reason to be conceived as the correct view of change of a thing's property: a thing x does change in respect of its property, F-ness, if it is put in a different condition or situation relevant to that F-ness.

Moreover (so it is pointed out in the paper), the alternative view that is rejected in the passage, namely the common-sense view that Socrates' 'becoming larger' or 'becoming smaller' is due to the fact that some measure of length is added, or taken away from, his stature, is a view of exactly the same kind as the one which is rejected by Socrates (Plato), according to the important *Phaedo* passage (96A–102A), in the course of his arriving at the theory of Forms. The crucial reason why Socrates (Plato) has been led to hold the theory of Forms, accoding to that passage, is that he has become definitely unsatisfied with the thinking that it is because some

addition is made to the original bulk that a thing becomes larger: it is not because of *that*, he says, but just because of the Large itself, that a thing becomes larger, and so with other properties.

We can thus see quite well why the argument in the puzzles passage in the *Theaetetus* has every appearance of being seriously meant; for, Plato is there looking again into, and virtually re-affirming, the very line of thought in which his theory of Forms originates.

With this in mind, the present writer traces the relevant passages from the *Phaedo* through the *Parmenides* to identify the real difficulty Plato has most seriously realized about the way of describing the theory of Forms, and, by identifying it as arising from an ontological commitment to the priority of individual thing ('this something'), which is implied in the 'participation' idioms, the writer then proceeds to try to throw further light on the important significance, for the develpment of Plato's philosophy and for the solution of that difficulty in particular, of the content of the puzzles passage and the theory of perception in which the puzzles are interpolated in the *Theaetetus*.

On the Meaning of πρᾶγμα in Aristotle's *Poetics*

by Akira Yamada
Professor of
Occidental Medieval
Philosophy,
Fuculty of Letters
Kyoto University

According to a Greek-English lexicon, the word πρᾶγμα has two meanings, that is *action* and *thing*. In what way these meanings are related? This is a problem.